

島本町文化財調査報告書

第41集

西浦門前遺跡発掘調査概要報告

令和4年3月

島本町教育委員会

序 文

本報告書は、原因者負担で実施した平成 26 年度の西浦門前遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

西浦門前遺跡の範囲は、桜井遺跡の範囲と一部重複していますが、当該地において研究棟建設工事が計画されたため、当初は、桜井遺跡の遺跡範囲を確認するための確認調査として埋蔵文化財調査を実施しました。その確認調査の中で、研究棟建設予定地北側で鎌倉時代の遺構・遺物を確認したため、大阪府教育委員会において新たな埋蔵文化財包蔵地「西浦門前遺跡」として登録され、研究棟建設予定地北側の発掘調査を実施することとなりました。

その発掘調査の結果、この地は平安時代以降の人々の活動が確認でき、鎌倉時代には庭園が築かれ、室町時代には庭園が寺院の一部に組み込まれていき、近世には農地として利用されるという土地利用の変遷を解明することができました。

特に、鎌倉時代の庭園遺構は、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮の一部である可能性が高く、我が国の院政期の御所跡の研究に重要な資料となるものと思われます。また、これらの遺構は、本町の歴史を語る上でも非常に重要なものであると考え、事業者の協力の下、庭園遺構の一部を町立歴史文化資料館の敷地内に移築復元を行いました。

このような成果を得られましたのも、事業者、土地所有者の方々、そして、調査地近隣及び関係諸機関の皆様の御理解と御協力を頂いたからこそ成し得たものです。改めてここに深く感謝し、お礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも変わらぬ御支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 4 年 3 月

島本町教育委員会
教育長 中村 りか

例　　言

- 1 本書は、平成 26 年度に、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、島本町教育委員会が原因者負担で実施した西浦門前遺跡の発掘調査に関する報告書である。
- 2 調査は、島本町教育委員会事務局教育子ども部生涯学習課職員木村友紀を主担当、株式会社文化財サービス職員大西晃靖を副担当とし、平成 26 年 6 月 16 日に着手し、平成 26 年 8 月 31 日に終了し、島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、令和 4 年 3 月 31 日に本書の刊行をもって完了した。
- 3 調査及び整理作業に当たっては、以下の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)
【調査員】坂根 瞬 原 由美子
【調査補助員】布施 英子、川端 玲子、竹村 洋香、萱原 朋奈、眞子 悠乃
- 4 本書の執筆は木村(第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 4 章、第 5 章第 3 節、第 6 章)及び久保 直子(第 5 章第 1 節・第 2 節)が行い、作成・編集は木村及び坂根が行った。
- 5 本調査に関わる資料の保管及び活用並びに本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれに当たる。
- 6 発掘調査及び本書の作成に当たり、以下の方々の御助言と御協力を得た。記して、感謝します。(五十音順・敬称略)
尼崎 博正、石神 裕之、井戸 竜太、

今江 秀史、上村 和直、岡田 賢、岡田 文男、岡本 敏行、木村 理恵、小森 俊寛、鈴木 久男、鈴木 久史、大洞 真白、高橋 昌明、地村 邦夫、徳村 盛市、飛田 範夫、仲 隆裕、南 孝雄、橋本 清一、浜中 邦弘、林 亨、三好 美穂、持田 透、山上 弘、山口 誠司、山田 邦和

凡　　例

- 1 本書に用いた標高は、東京湾平均海水面(T.P. [Tokyo Peil])を基準とした数値である。方位は、国土座標第Ⅳ系における座標北である。
- 2 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』第 37 版(日本色研事業株式会社、平成 26 年発行)を使用した。
- 3 遺構記号については、以下のとおりである。
P : ピット S K : 土坑
S D : 溝 S G : 庭園遺構
S X : 不明遺構
- 4 本書で使用している北は、特に断りのない限り「真北」を示す。

目　　次

序文	
例言・凡例・目次	
挿図目次・付表・図版目次	
第 1 章 はじめに	1
第 1 節 島本町の地理的概要	1

第2節 島本町の歴史的環境	2	第11図 P 136 (1/50)	12
第2章 調査経緯	4	第12図 S D 02 アゼ断面図 (1/50)	12
第3章 層序	4	第13図 S K 04・S K 05 (1/50)	13
第4章 検出遺構	12	第14図 S K 06 (1/50)	13
第1節 第1遺構面	12	第15図 S X 01 (1/50)	14
第2節 第2遺構面	18	第16図 S X 08 (1/50)	14
第3節 第3遺構面	27	第17図 S X 30 (1/50)	14
第5章 出土遺物	34	第18図 石列1 (1/50)	14
第1節 土器・陶磁器類	34	第19図 石垣 (1/50)	15
第2節 石造物	37	第20図 第1遺構面遺構断面図1 (1/50)	
第3節 瓦	38		16
第6章 まとめ	50	第21図 第1遺構面遺構断面図2 (1/50)	
第1節 土地利用の変遷	50		17
第2節 終わりに	53	第22図 第1遺構面遺構断面図3 (1/50)	
			18

挿図目次

第1図 島本町内遺跡分布図 (1/20,000)		第23図 第2遺構面平面図 (1/300)	19
第2図 平成26年度西浦門前遺跡(NM14 -1 西浦・西浦門前)発掘調査	5	第24図 S D 01 (1/80)	20
調査位置図 (1/2,500)		第25図 S D 80 (1/50)	21
第3図 調査区北壁断面図 (1/80)	6	第26図 S K 38 (1/80)	21
第4図 南北セクション・調査区南壁・調 査区東壁断面図 (1/80)	7	第27図 S K 39 (1/50)	21
第5図 東西セクション・南北セクション 西側断面図 (1/80)	8	第28図 S K 46 (1/50)	22
第6図 南北トレンチ断面図 (1/80)	9	第29図 石列2 (1/50)	22
第7図 東西セクション東側断面図 (1/80)	10	第30図 S X 04 (1/80)	22
第8図 調査区北東部東西セクション南断 面図 (1/80)	10	第31図 S X 15 検出状況写真(東から)	
			22
第9図 第1遺構面平面図 (1/300)	11	第32図 石溜り (1/50)	22
第10図 P 54 (1/50)	12	第33図 第2遺構面遺構断面図1 (1/50)	
			23
		第34図 第2遺構面遺構断面図2 (1/50)	
		第35図 第2遺構面遺構断面図3 (1/50)	
			24
			25

第36図 第3遺構面平面図 (1/300) --- 26	付表6 観察表 丸瓦 ----- 49
第37図 P 589～P 592 (1/80) ----- 27	付表7 観察表 平瓦 ----- 49

図版目次

第38図 S K 78 遺物出土状況 (1/50)	----- 27	図版一 椰査地全景・第1遺構面空撮
第39図 S K 63・P 426・P 427・P 480・P 600 (1/80) ----- 28		椰査地全景 (西から) 第1遺構面空撮
第40図 S G 01 第Ⅱ期 (1/80) ----- 29		図版二 第2遺構面空撮・第3遺構面空撮
第41図 S G 01 第Ⅰ期 (1/80) ----- 30		第2遺構面空撮
第42図 S G 02 アゼ断面図 (1/50) - 31		第3遺構面空撮
第43図 第3遺構面遺構断面図1 (1/50)	----- 32	図版三 第1遺構面検出遺構1 P 136 (南から)
第44図 第3遺構面遺構断面図2 (1/50)	----- 33	S D 02 (西から) S D 02 - 石五輪塔出土状況 (西から)
第45図 第3遺構面遺構断面図3 (1/50)	----- 34	S D 02 (調査区西壁) 五輪塔 (水輪) 出土状況 (東から)
第46図 出土遺物1 (1/4・1/8) ----- 34		S K 04・S K 05 (西から)
第47図 出土遺物2 (1/4) ----- 35		S K 06 (北から)
第48図 出土遺物3 (1/4) ----- 35		S X 01 (西から)
第49図 出土遺物4 (1/4・1/8) ----- 36		S X 01 断面 (西から)
第50図 出土遺物5 (1/4・1/8) ----- 37		図版四 第1遺構面検出遺構2・第2遺構面
第51図 出土遺物6 (1/8) ----- 38		検出遺構1
第52図 出土遺物7 (1/4) ----- 44		S X 08 (西から)
第53図 出土遺物8 (1/4) ----- 45		S X 08 断面 (南から)
第54図 出土遺物9 (1/4・1/5) ----- 46		S X 30 (南から) 石列1 (北から) S D 01 瓦出土状況 (東から)

付 表

付表1 観察表 土器・陶磁器類1 ----- 47	S D 80 (南から)
付表2 観察表 土器・陶磁器類2 ----- 48	S K 38 (東から)
付表3 観察表 石造物 ----- 48	S K 39 (西から)
付表4 観察表 軒丸瓦 ----- 49	図版五 第1遺構面検出遺構3・第2遺構面
付表5 観察表 軒平瓦 ----- 49	検出遺構2

石垣（東から）

S D 01（南から）

図版六 第2遺構面検出遺構3・第3遺構面

検出遺構1

S K 46（東から）

石列2（東から）

S X 04（西から）

石溜り（南から）

P 589～P 592（東から）

S K 63・P 426・P 427・P 480・P

486・P 487・P 600（西から）

S K 78（北から）

S G 01 景石1（東から）

図版七 S G 01

S G 01 第Ⅱ期（南から）

S G 01 第1期（南から）

図版八 第3遺構面検出遺構2

S G 01 滝組（南から）

S G 01 景石2（東から）

S G 01 景石2信楽焼出土状況（南から）

S G 01 北西遺水石組（東から）

S G 01 瓦器据付状況（東から）

図版九 出土遺物1

図版一〇 出土遺物2

図版一一 出土遺物3

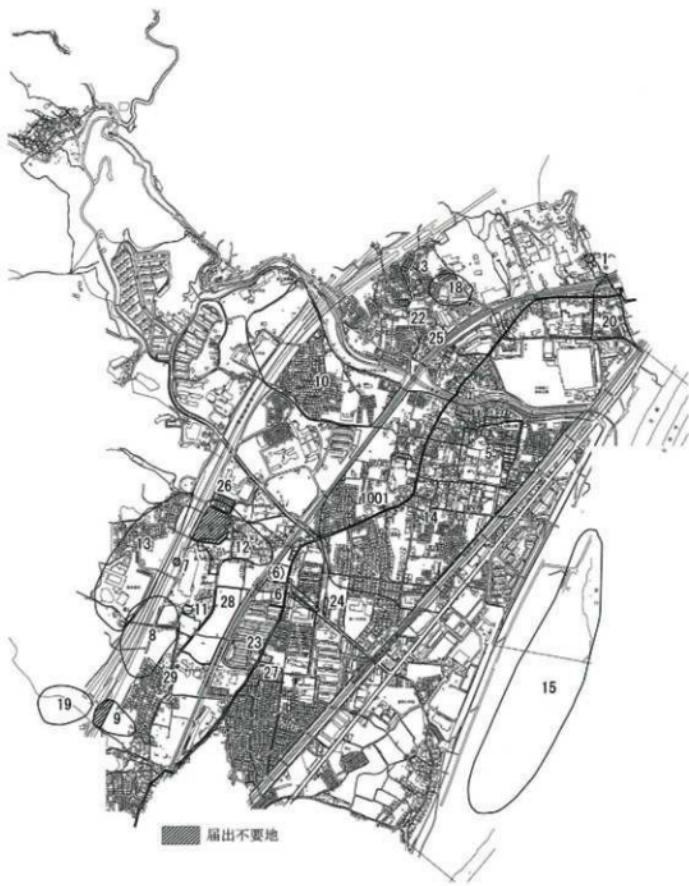
図版一二 出土遺物4

図版一三 出土遺物5

図版一四 出土遺物6

図版一五 出土遺物7

図版一六 出土遺物8



第1図 島本町内遺跡分布図 (1/20,000)

第1章 はじめに

第1節 島本町の地理的概要

島本町は、大阪府の北東端部、京都府との境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市と、西側は大阪府高槻市と、南端は大阪府枚方市と隣接する。町域は、概ね南北約8.9km、東西約3.3kmの範囲に南北に細長く広がり、その面積は16.81km²となる。その地形は、町の北側が山地・丘陵地、その南側は平野部となるが、山地・丘陵地が町域の約7割を占めている。島本町史によると、山地部北側にはポンポン山山地が連なり、その南東側に一段低い天王山山地がある。これらの山地は、主に丹波層群によって構成され、砂岩、頁岩、チャート等の岩石からなる。そして、天王山山地の南側には、狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵と呼ばれる丘陵地が見られ、主に大阪層群によって構成されている。

また、平野部は、9～13m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地と呼ばれる。本町南東の山崎狭隘部においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となって大阪平野を西流するが、本町には、淀川のほか、山地・丘陵地を源とする水無瀬川、善峰川、滝谷川、鈴谷川、越谷川、八幡川、西谷川等の河川があり、水無瀬川を除いては、山地・丘陵部から短く平野部に流れ出るという小規模なものが多い。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、水無瀬川等の他の河川からの堆積物によっても構成され、小河川付近には扇状地地形が広がる。また、水無瀬川沿いには、河岸段丘地形が見られる箇所もある。

現在、本町域では、平野部から丘陵部にかけて宅地や工業用地として開発が進んでいるが、いまだ山地部には開発が及ばない範囲が広く、森林樹が良好に保たれており、「大沢のすぎ」、「尺代のやまもも」、「若山神社のツブラジイ林」が大阪府により天然記念物として指定されている。

島本町は、古代の国郡制においては摂津国島上郡に属するが、東は山城国に接し、その地勢から交通の要衝となっていた。南に流れる淀川は、水運の重要な交通路であり、特に長岡京・平安京遷都以降は、その重要性を増していく。平安時代、山崎には津が整備され、また、遡る奈良時代には架橋もされ⁽¹⁾、淀川を介した島本町付近の地域的重要性が分かる。そして、水運ばかりではなく、淀川と丘陵部との間に挟まれた平野部上においては、京と西国とを結ぶ山陽道（西国街道）が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。現在も町域には、JR東海道本線、東海道新幹線、阪急電鉄京都線、国道171号等、重要な交通幹線が通っており、大阪と京を結ぶ中間地点としても、古来から島本町の地勢的位置付けは、重要性の高いものであった。

第2節 島本町の歴史的環境

島本町における人々の活動の痕跡をたどると、最も古くは旧石器時代にまで遡る。段丘上に位置する山崎西遺跡では、国府型ナイフ形石器やサヌカイト剥片を数点採集しており、後期旧石器時代におけるキャンプサイトなどの存在を想定することができる。

縄文時代になると、段丘上に位置する越谷遺跡において縄文時代中期の土器片が多数出土している。また、平野部に広がる広瀬遺跡では縄文時代晩期の竪穴式建物跡を確認しており、集落が展開していた可能性が考えられる。

次に、弥生時代では、桜井駅跡で弥生時代前期の遺物の出土しているが、弥生時代中期になると、青葉遺跡A地点・B地点において竪穴式建物跡や溝を検出しており、桜井駅跡・広瀬溝田遺跡では耕作溝を確認している。これらは、いずれも平野部に位置する遺跡であり、この付近一帯においては、弥生時代中期に集落や耕作地が広がっていたものと考えられる。また、弥生時代後期になると、段丘上に位置する越谷遺跡や伝侍宵小侍從墓において当該期の遺物の出土を確認している。

古墳時代においては、これまでのところ集落に関わる明確な遺構を検出していないが、広瀬遺跡や越谷遺跡などで古墳時代後期の遺物が出土している。越谷遺跡では、名神高速道路建設工事に伴い出土した遺物の中に、古墳の副葬品と考えられる須恵器杯・壺、刀等の遺物が存在した。また、源吾山遺跡と神内古墳群は、平野部を南に望む丘陵上に位置し、一続きの古墳群であろうと推定されている。源吾山遺跡は、横穴式石室の一部と考えられる石材の散布と、名神高速道路建設工事に伴い出土した副葬品と考えられる須恵器から古墳の存在が想定でき、島本町と高槻市をまたいで広がる神内古墳群においては、高槻市側で横穴式石室が確認されており、ほかに墳丘のような形態の地形が存在している。

飛鳥～奈良時代になると、丘陵部で鈴谷瓦窯が操業した。これまでに2基の瓦窯跡が中学校教諭による発掘調査において確認されており、出土瓦の特徴から、7世紀末から8世紀初頭にかけてのものと考えられている。また、鈴谷瓦窯跡の南西側にある御所ノ平遺跡では竪穴式建物跡を確認しており、建物跡内から鈴谷瓦窯跡と同様の瓦や粘土塊が出土していることから、瓦製作の工房跡の可能性がある。このほか、奈良時代中期には、水無瀬川右岸において東大寺領水無瀬荘が存在していたことが、正倉院に伝わる「摂津職鳩上郡水無瀬荘図」によって知ることができ、その付近一帯が水無瀬荘跡として埋蔵文化財包蔵地となっている。

ところで、前節で島本町は水運・陸路とも交通の要衝であったと述べたが、『続日本紀』和銅4年(711)正月丁未条には、平城京と西国とを結ぶ幹線道路上に駅伝制の駅が置かれたとあり、島本には大原駅が設置されたということが定説となっていた。大原駅は、平安時代前期のうちには廃止になったようであるが、長岡京・平安京遷都を経て平安時代になると、京と西

国とを結ぶ交通の要衝としての島本の地の重要性は増していった。広瀬遺跡においては、西国街道沿いで発掘調査で、小石敷きの路面を持つ中世の道路状遺構を検出している。そこには平安時代の遺物も含まれ、その整備が古代にまで遡る可能性がある。また、淀川河川敷にある広瀬南遺跡では、川道中から須恵器の大甕が見つかっており、これは、淀川の水運により運ばれてきたものの可能性がある。

さて、このような地勢にある島本町においては、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地へ訪れるようになった。桓武天皇や嵯峨天皇は遊獵に訪れ、文徳天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いている。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物群が検出しているが、これは、惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性がある。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元（1199）年に水無瀬離宮の造営を行った。この水無瀬離宮は、建保4（1216）年の洪水で倒壊したが、翌年には丘陵上に再建されている。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物跡や所用瓦を検出しておらず、また、丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園施設と考えられる遺構を検出している。

その後、建武新政から室町時代へと時代が動く時に、楠木正成・正行父子が別れた場所として太平記に記述のある桜井宿が、現在桜井駅跡として国史跡に指定されている。父子別れの場面は太平記という軍記物語の一場面であり、事実であるかどうかは不明であるが、発掘調査でこれに関する資料は得られていない。また、桜井駅の前身として、近辺に大原駅があったと考えられているが、これまでのところ、これら駅に関連する資料についても確認していない。ただし、桜井駅跡における発掘調査では、前述の弥生時代の遺構・遺物のほか、鎌倉時代、室町時代及び江戸時代の遺構・遺物を検出しておらず、特に、室町時代から江戸時代にかけての井戸を複数まとめて確認している。

近世以降になると、発掘調査で得られた資料では、山崎東遺跡において地下貯蔵庫の痕跡と考えられる石組み遺構を検出している。

【註】

（1）津及び架橋地点は、大山崎町内に比定されている。

【参考文献】

島本町町史編さん委員会『島本町史』本文篇 島本町役場 昭和50年

島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書』第1集～第35集 島本町教育委員会 平成3年～平成31年

名神高速道路内遺跡調査会『水無瀬莊跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 平成8年

名神高速道路内遺跡調査会『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 平成9年

第2章 調査経緯

調査地（第2図）は、昭和15年（1940）に帝国在郷軍人会大阪支部が桜井ノ駅射撃場を建設し、戦後廃止されると、昭和32～33年（1957～1958）に町営鶴ヶ池住宅28戸が建てられた場所として知られている場所であり、調査前は、島本町役場公用車及び職員有料駐車場並びにふれあいセンター臨時駐車場として利用されていた。それ以前の土地利用については判然としないが、調査地の北隣の土地の小字名が「安養寺山」であり、この付近に寺院が存在した可能性がある。

埋蔵文化財包蔵地としては、調査地南半が弥生時代～近世の集落跡である桜井遺跡の範囲内であり、北半は埋蔵文化財包蔵地外となる。桜井遺跡内での埋蔵文化財の調査例は少ないが、弥生時代後期の遺物が表採されており、弥生時代後期の集落の存在が想定されている。調査例としては、調査地の南に面する尾根状地形（現・島本町ふれあいセンター）の確認調査を平成4年度に名神高速道路内遺跡調査会が実施しているが、遺構・遺物の存在は確認されていない。

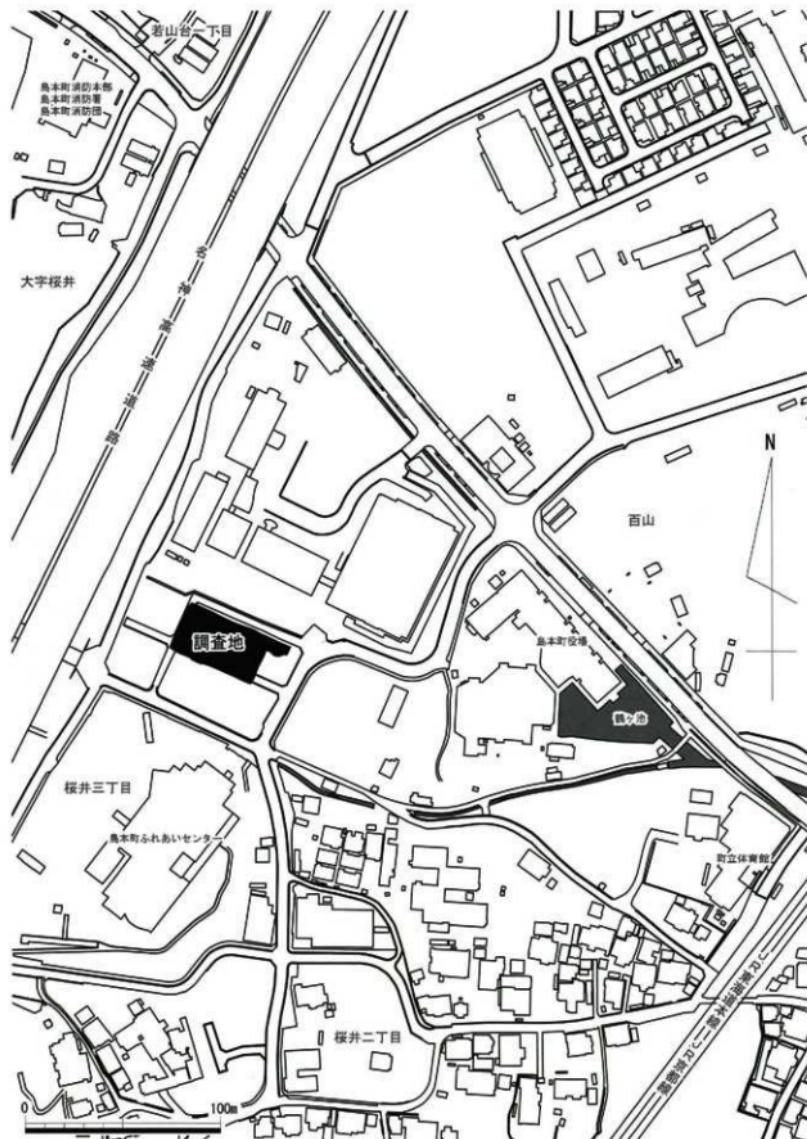
しかし、調査地に、総敷地面積4,939m²と広大な研究施設の建設工事が計画され、その範囲内に未知の埋蔵文化財が存在する可能性もあったため、平成26年5月22日から平成26年6月2日まで、桜井遺跡の範囲内外の425.2m²の試掘調査及び確認調査を実施した。その結果、調査地南半は、湿地帯状堆積が続き、明確な遺構・遺物の存在は確認できなかったが、北半において中世の遺構・遺物の存在を確認した。そのため、文化財保護法第96条第1項の規定により、事業主から「遺跡の発見届」が提出され、今回の開発の範囲は、新たな埋蔵文化財包蔵地「西浦門前遺跡」として登録されることとなった。また、試掘調査及び確認調査成果を基に事業主と協議を行った結果、中世の遺構・遺物の存在を確認した開発の敷地北半1,579.2m²を対象として発掘調査を実施することとした。

発掘調査は、平成26年6月16日から平成26年8月31日まで実施し、その結果、この地の平安時代以降の土地利用の変遷を知ることができた。また、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮に関連する施設と考えられる遺構を検出し、事業主の協力の下、その遺構の一部を町立歴史文化資料館に移築復元することとなった。

本報告では、これらの発掘調査成果について、報告を行うものである。

第3章 層序

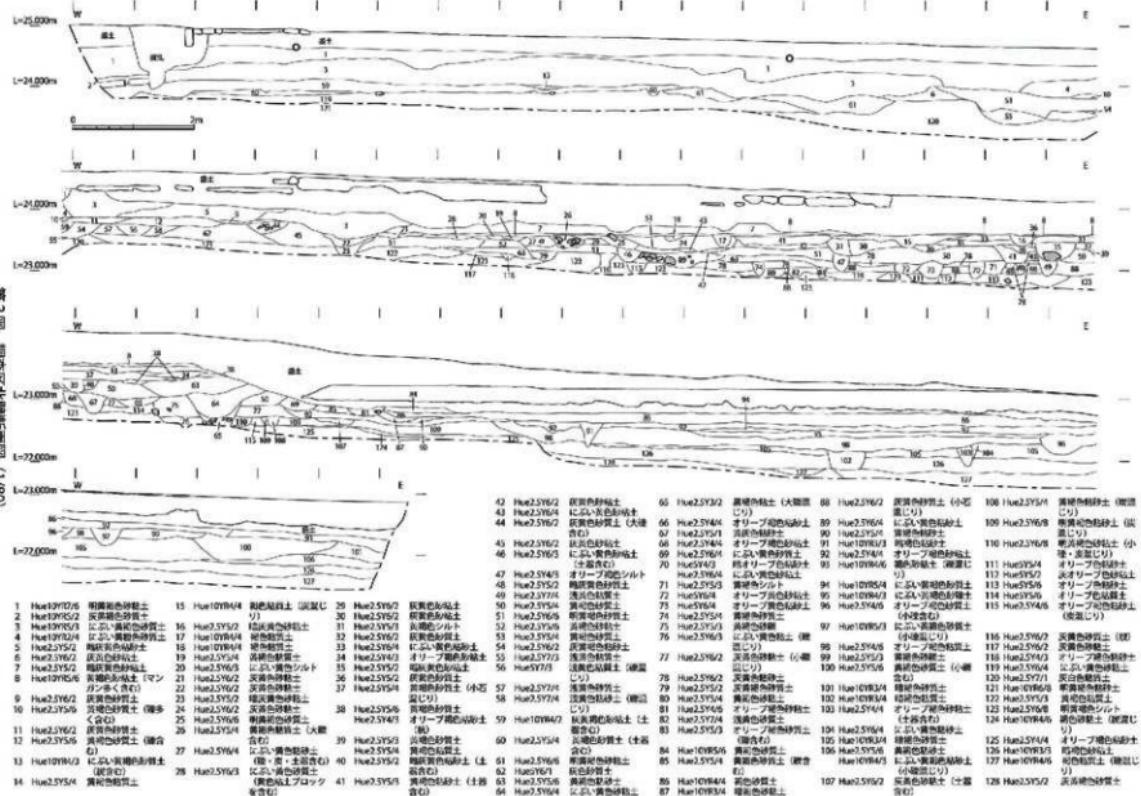
当調査地は、西側が高い傾斜地であり、調査区西端と東端では、約2mの高低差を有する。調査地の掘削を行ったところ、射撃場、町営住宅及び駐車場などの時の盛土があり、その下層に、室町時代末以降の耕作土（第3図第3・7層）や床土（第3図第8・9・86層）が堆積しているのを確認した。それらの直下に遺構を確認したため、第1遺構面としたが、調査区

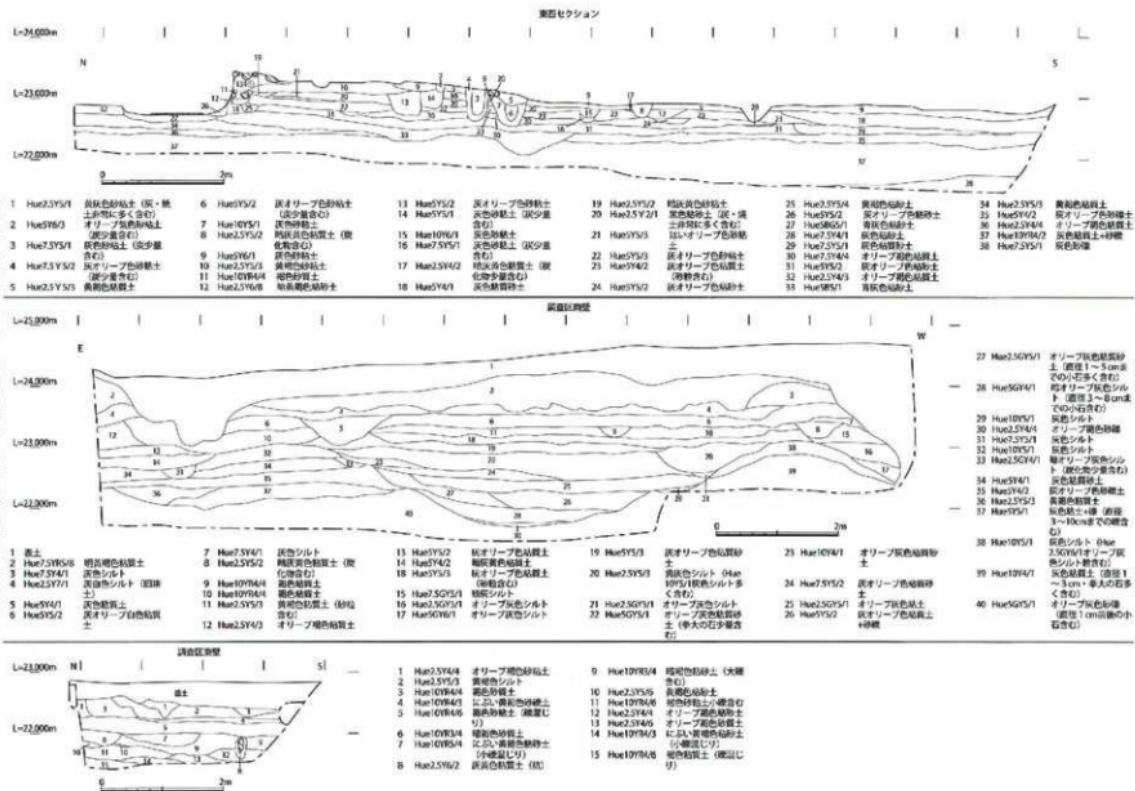


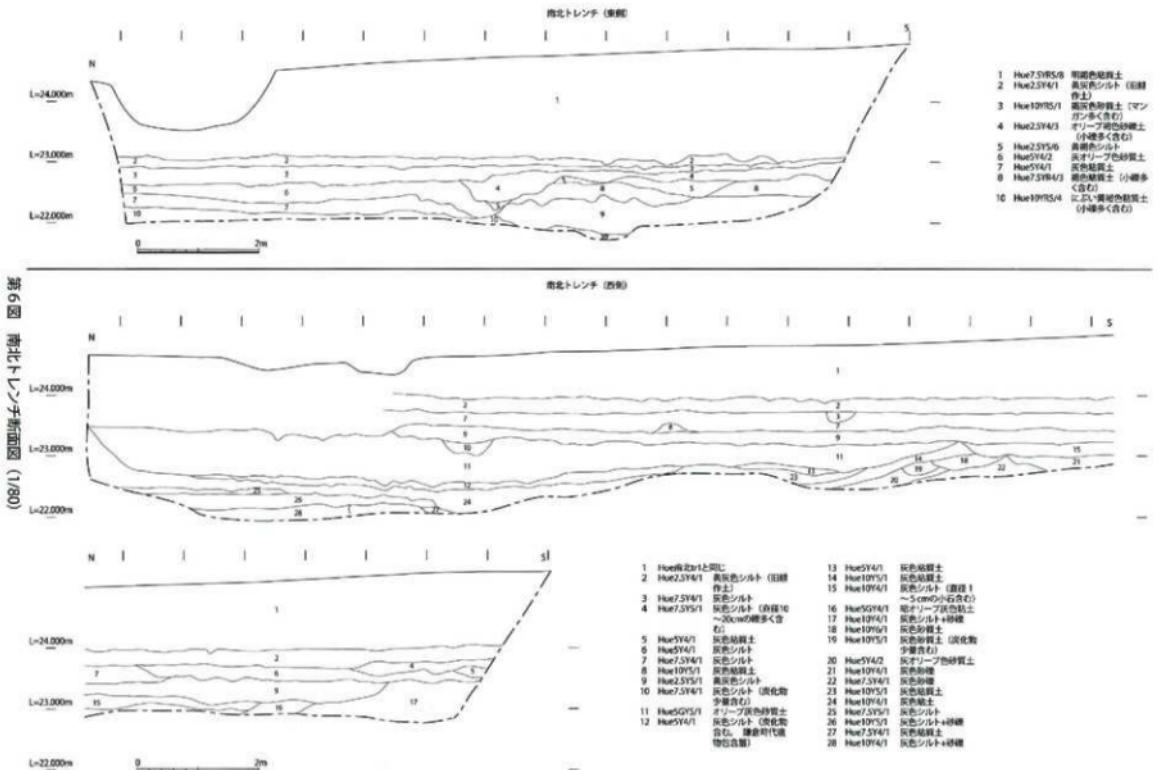
第2図 平成26年度西浦門前遺跡 (NM14-1 西浦・西浦門前) 発掘調査調査地位置図 (1/2,500)

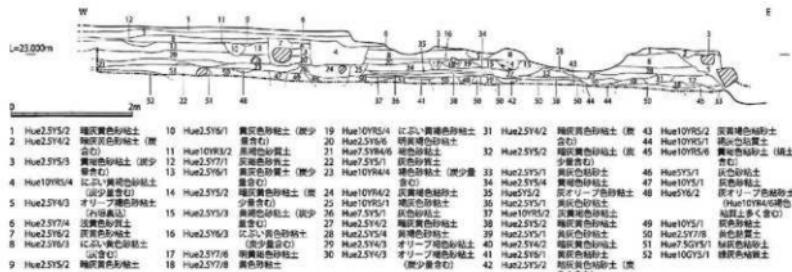
第三回 調査区北壁断面図

6

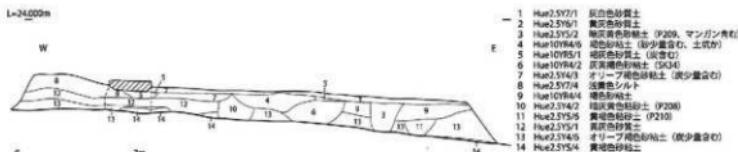








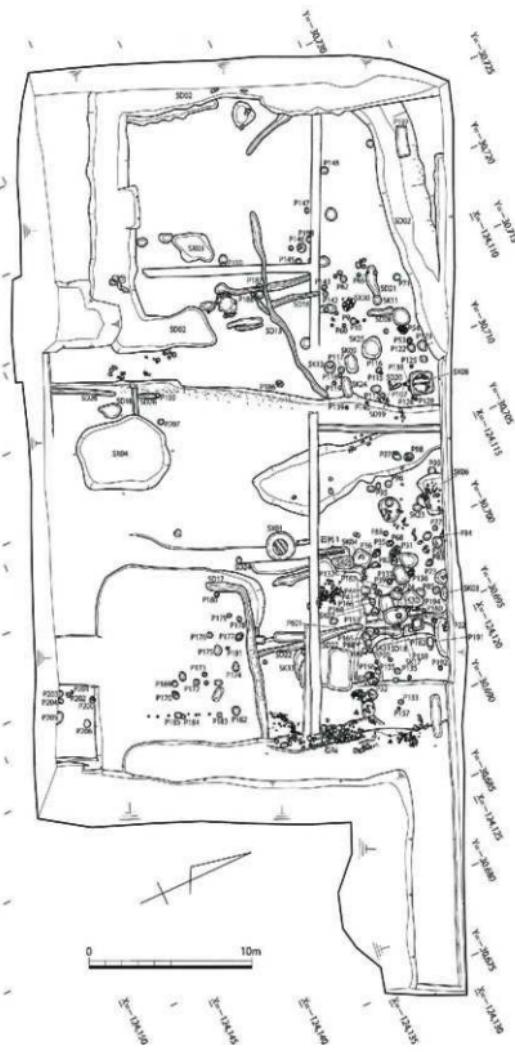
第7図 東西セクション東側断面図 (1/80)



第8図 調査区北東部東西セクション南断面図 (1/80)

西側は、鎌倉時代以降の堆積層が削平されていた。それに対して、東側は、室町時代後期以前の堆積層が、比較的良好に残存している状況であった。調査区西側では、地表面から約1.2mの深さに、灰黄褐色～明黄褐色粘砂土（第3図第77・78・88・109・110層）が面的に広がることを確認した。この灰黄褐色～明黄褐色粘砂土は、比較的土質が安定しており、他の土の混ざり込みの少ないものであるため、ある時期に整地されたものである可能性があると考え、この直上を第2遺構面として面的に調査を行った。灰黄褐色～明黄褐色粘砂土直下にも、遺構・遺物の存在を確認したため、第3遺構面として面的に調査を行った。西側は、灰黄褐色～明黄褐色粘砂土に対応する土層は確認できなかったが、第3図第45・57・58・62・119・120層直上を第2遺構面とし、その直下を第3遺構面として調査を行った。同一の遺構面とした中でも、後世の削平などにより、検出した遺構の年代が大きく異なるものがあるが、調査時に記録した平面図のまま掲載することとする。当調査では、大きく分けて、13世紀～14世紀前半、15世紀、15世紀末～16世紀前半の遺構・遺物が出土しており、これらの時代に活発な人々の営みがあったことがうかがえるが、西側の第3遺構面では、平安時代前期の遺物を含む遺構を確認している。

第3遺構面の調査終了後、調査区の東西に断割りを入れて、下層の堆積状況の確認を行ったところ、第3遺構面から下層は、粘質土と礫層の流路状堆積が続くことを確認した（第4図第33～38層、第5図東西セクション第118～126層）。また、調査地の南側も、試掘調査時に、



第9図 第1造構面平面図 (1/300)

盛土・耕作土・床土の下層は、粘質土と礫層の流路状堆積が続くことを確認している（第6図）。これらの成果により、今回の開発範囲は、平安時代までは全域が湿地性の環境であったことが明らかになった。平安時代以後、当調査地の北側が、徐々に土地利用されるようになり、鎌倉時代以降、本格的に利用されるようになったことがうかがえる。調査地東端付近は大きく攪乱を受けていたものの、北東部のみ残存しており、その部分の断割りを行い、堆積状況の確認を行ったところ、流路状堆積は確認できなかった。北東部から、縄文時代や平安時代の遺物が出土していることから、調査地東端付近は、地盤が比較的安定しており、古くから土地利用されている可能性がある。

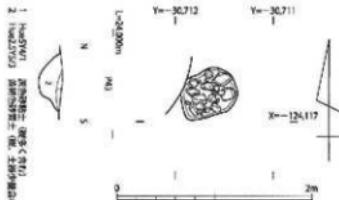
第4章 検出遺構

第1節 第1遺構面

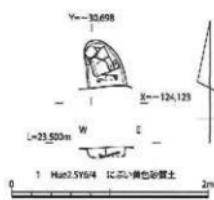
P 54（第10図）直径45cm、深さ25cmのピットであり、炭を多く含む埋土の上面に7～20cmの石が集まっている状況を確認した。

P 136（第11図）南側がP 24に切られており、残存している南北幅は50cm、東西幅約40cm、深さ9cmの楕円形のピットである。埋土内からは、15世紀後半の瓦器の羽釜一個体分が出土した。また、国産陶器片1点が、出土している。

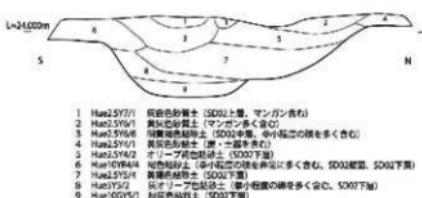
S D 02（第12図）調査区西端付近を南北に延び、北端付近及び南端付近で東に曲がる溝跡であり、調査区西側を四角く開むように延びている。南側は、東に曲がった後、15m東側で



第10図 P 54 (1/50)



第11図 P 136 (1/50)



第12図 SD 02 アゼ断面図 (1/50)

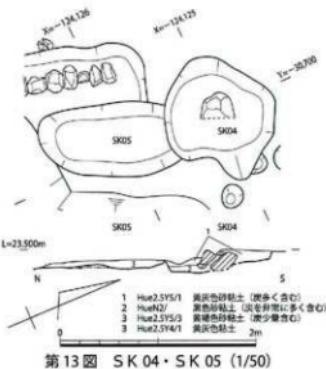


更に北に曲がる。幅約3m、深さ50～80cmである。埋土内に近世遺物を含んでいるため、近世、この地が農地であった時に、区画溝や水路として利用されたものと思われる。埋土内の遺物としては、土師器・須恵器・国産陶器・瓦が出土している。土器類以外に、五輪塔の水輪部分1つ、一石五輪塔2本が出土しており、調査地周辺に、寺院や墓地が存在したことをうかがわせる。

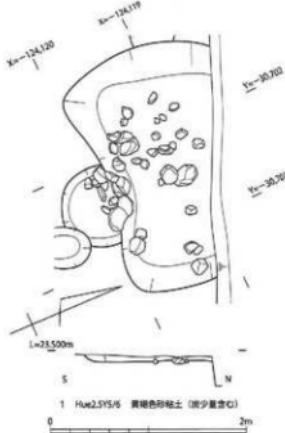
S K 04・S K 05（第13図） S K 04は、平面形状が直径約1.1mのほぼ円形を呈する土坑であり、深さは22cmである。埋土内には、多くの炭を含み、S K 04の中心付近には、直径32cmの石が存在する。S K 05は、S K 04に切られているが、平面形状が長径約1.5m、短径約70cmの楕円形を呈する土坑であり、深さは8cmである。少量であるが、S K 04と同様に、埋土内に炭を含む。

S K 06（第14図） 調査区北壁付近で、平面形状が円形を呈すると思われる土坑の南半を検出した。検出した南北幅は1.2m、東西幅は2.5mであり、深さは7cmである。埋土内には、炭を少量含み、埋土の上面には、6～26cmの石が多く集まっていた。

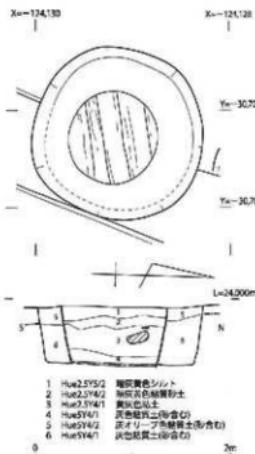
S X 01・S X 08（第15・16図） 当調査地からは、試掘調査時も含めると、計3基の埋設された木桶を検出した。S X 01は、直径約1mのものであり、底部から約60cm残存している。掘形は、直径約1.7mの円形である。S X 08も、直径約1mのものであるが、底部のみ残存している状況であった。掘形は、一辺約1.4mの正方形を呈する。木桶内及び掘形埋土内から、土師器・須恵器・瓦器・瓦・土製品が出土している。S X 01からは、中世遺物も含むが、17世紀の国産陶器類も含まれ、それ以前に使用されたものであることがうかがえる。S X 08も、近い年代のものであろう。この木桶は、周辺の遺構から寺院に関連するものと思われる室町時代後期の遺物やS D 02から五輪塔などが出土していることから、土葬の際に使われたものの可能性もあるが、近世以降、この地が農地化することや木桶内に遺物をほとんど含まないことから、農地に利用する水溜めや肥溜めといった用途を想定す



第13図 SK 04・SK 05 (1/50)



第14図 SK 06 (1/50)

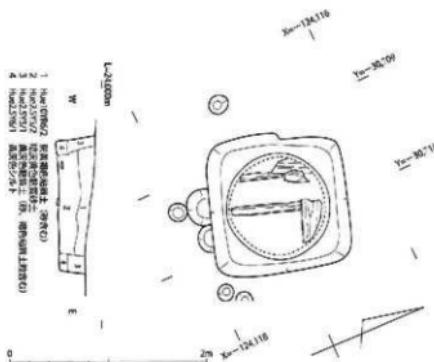


第15図 SX 01 (1/50)

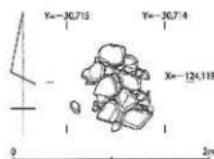
るのが適当ではないかと思われる。

S X 30 (第17図) 試掘調査時に確認し、石組み遺構 S X 01 として報告したものである。25cm前後の石を、8個組み合わせたものであり、平面形状が長径 94cm、短径 49cmの梢円形を呈する。上面に平坦面をそろえ、高さもそろえて並べていることから、明らかに何かを上に乗せることを想定して組まれているが、その用途は不明である。建物の柱の礎石として利用したとしても、周囲に同様の遺構も存在せず、単独で見つかっている。

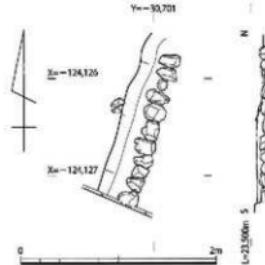
石列1 (第18図) 10~23cmの石を11個並べて配置しているものである。この石列1の並びは、南北の正方位から20度振る。SD 24 内で検出したため、周囲の地形が判別し難いが、後述する第2遺構面の石列2と同様に、土が流れ出さないようにする土留めと区画を明示することを目的とし



第16図 SX 08 (1/50)

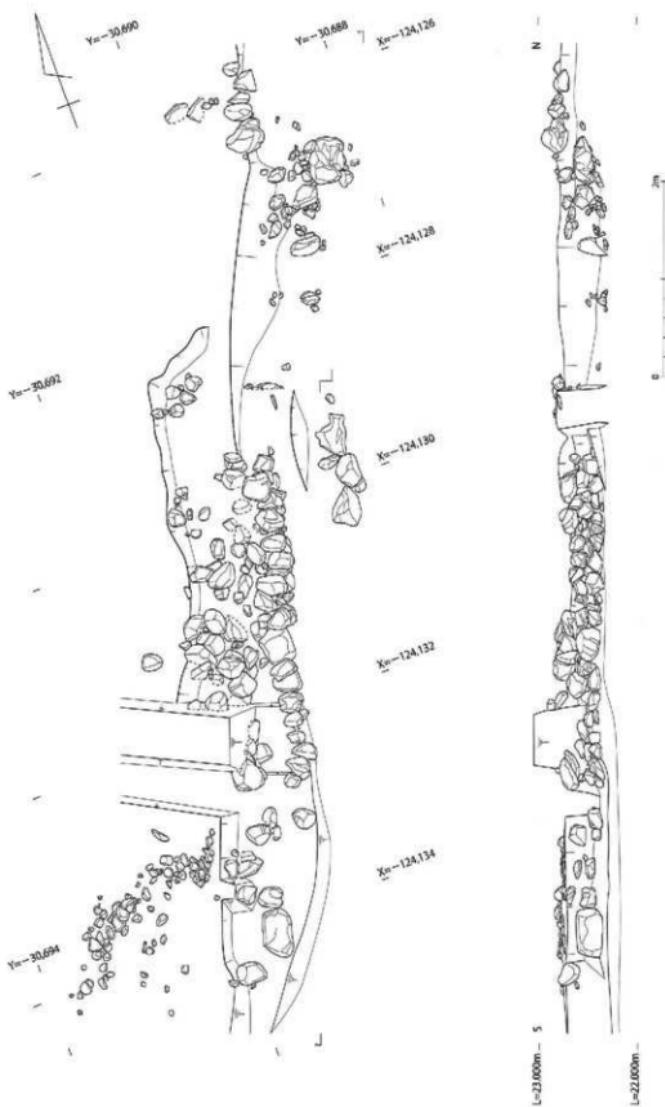


第17図 SX 30 (1/50)

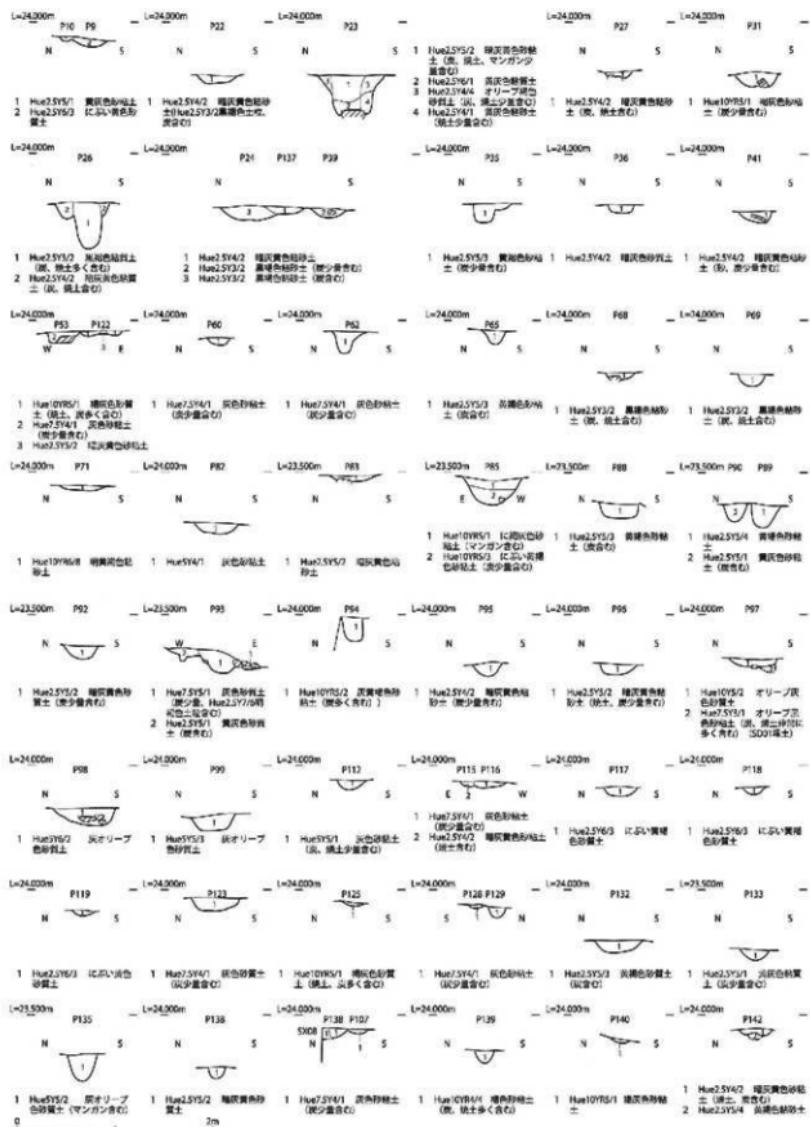


第18図 石列1 (1/50)

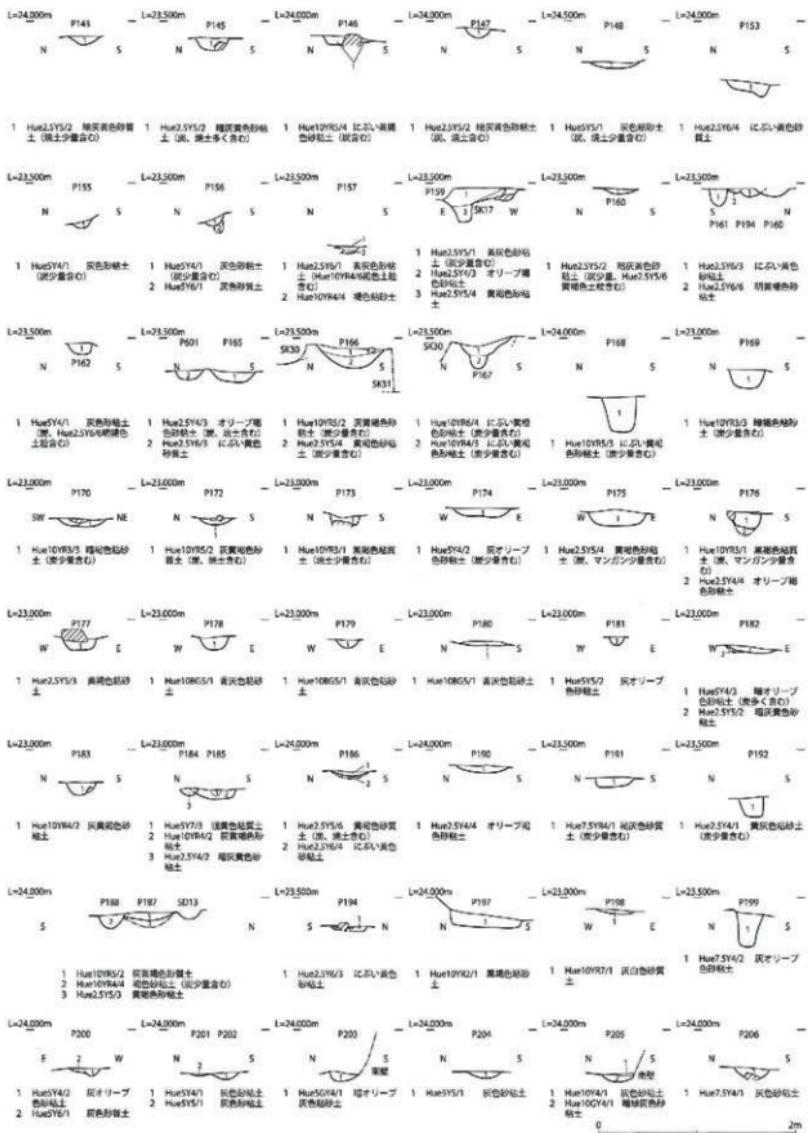
て、石列1の西側の平坦面と東側の緩やかな傾斜地の境目に石を配置したものである。石列1を据えている面は、石列2より約20cm高く、石列2が埋まった後に、石列1を設置し直したことがうかがえる。残存長 1.6 mであるが、本来は数メートル続いていたものと思われる。この石列上から、14世紀後半~15世紀の土師器の灯明皿、国産陶器の擂鉢などが出土している。



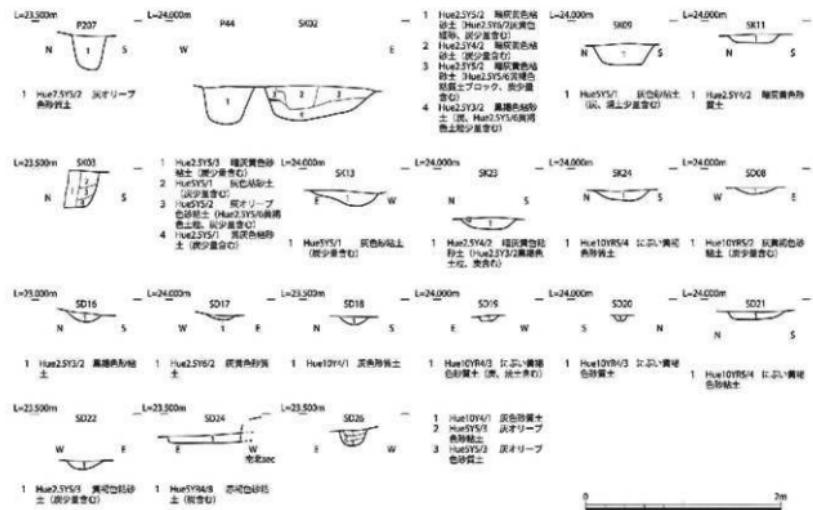
第19図 石垣 (1/50)



第20図 第1選択面透構断面図1 (1/50)



第21図 第1遺構面遺構断面図2 (1/50)

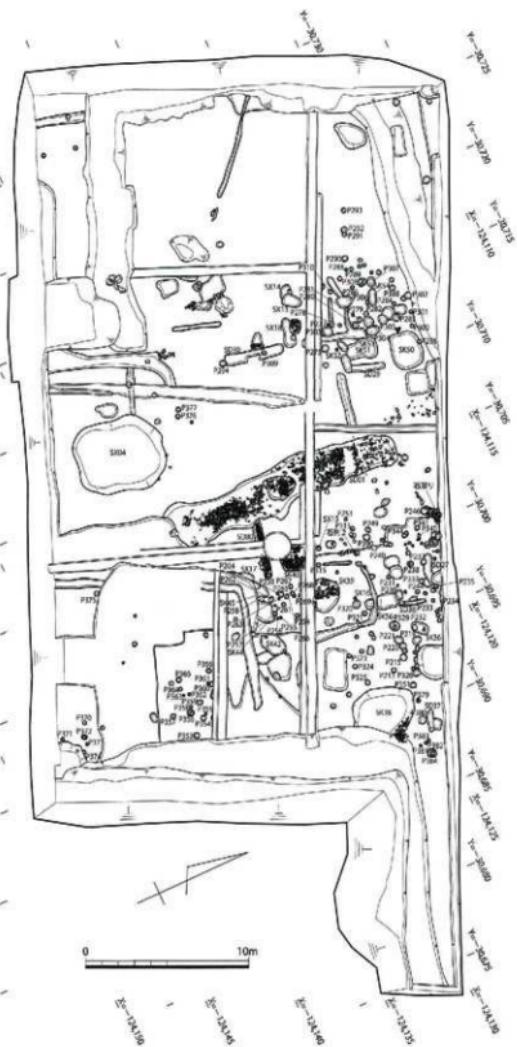


第22図 第1遺構面遺構断面図3(1/50)

石垣(第19図) 調査地東端付近で検出した残存長約9.5mの野面積みの石垣である。石垣は、南北正方位から14度東に振って、南北に延びている。使われている石は、20cm前後のものや30cm前後のものが多く使われているが、基底部には40~50cmのものも使われている。下から2段目までしか残存しておらず、残存高は50cmである。この石垣の裏込土内から、15世紀末~16世紀前半の土師器が出土しており、この石垣が15世紀末以降に築造されたものであることが明らかになった。今回の調査では、寺院に関連するような明確な遺構は見つかっていないが、この時期の遺物は、輸入陶磁器・国産陶器・瓦器の火鉢や風炉・瓦・石製宝篋印塔などといった寺院関連の遺跡から出土するものが多く、この石垣が寺域の東端を示すものとなる可能性がある。通常、この時期の寺院に石垣が使われることはないが、寺院に石垣といった防御的な機能を加え、簡易な壁として利用していた可能性がある。

第2節 第2遺構面

S D 01 (第24図) 南北に延びる長さ約15m、幅2~3m、深さ約20cmの溝跡であり、その埋土内に多量の瓦・炭・焼土を含む。溝の中心軸は、南北の正方位から東に2度振る。築地盤の版築などは確認できなかったが、溝内中央付近に瓦が一列に出土していることから、築地盤などの施設が倒壊した状況のまま検出されたか、施設に平行するよう掘られた溝に瓦が投棄されたものと考えられる。第2遺構面及び第3遺構面では、S D 01から東側にピットが密集しており、西側の稀薄な検出状況を考えると、やはり築地盤などといった空間を区切る施設

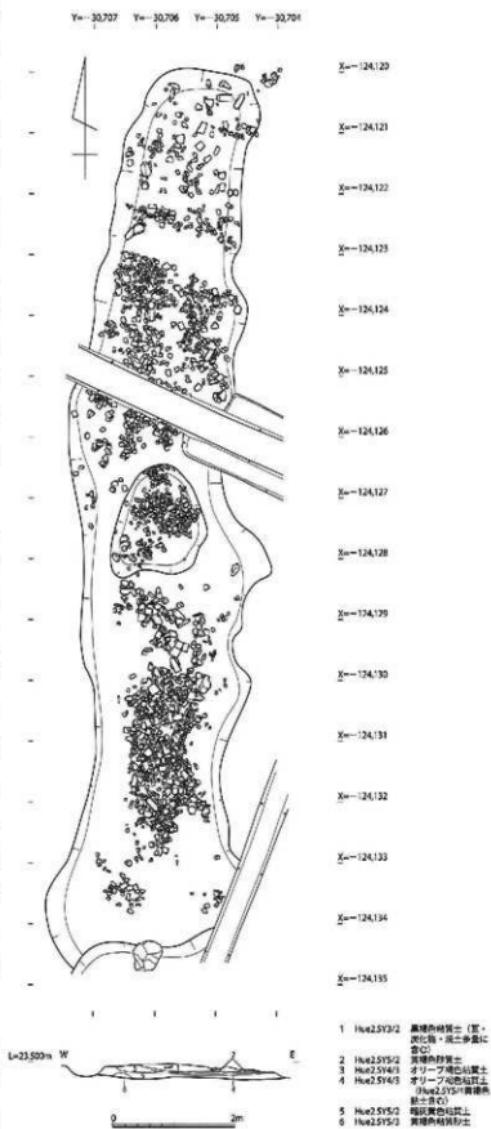


第23図 第2遺構面平面図 (1/300)

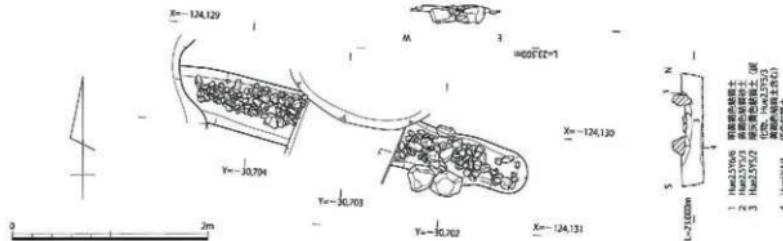
がこの付近に存在したと考えるのが妥当であろう。出土瓦の年代は、平安時代末～鎌倉時代前半に限られることから、この施設の補修は行われず、短期間に廃絶したことがうかがえる。少量ながら、この溝内から、13世紀の青磁や14世紀前半の土師器などが出土していることから、この施設の存続期間は、平安時代末～14世紀前半頃と考えられる。出土瓦に被熱しているものが多い点や溝埋土内に炭や焼土を多く含む点から、この施設は、火災に遭って焼失したことがうかがえる。

S D 80 (第25図) 長さ約3.7m、幅約50cmの東西方向に延びる溝跡である。溝跡の中心軸付近には、直径5～15cmの小礫が多く溜まっており、一見すると、建物跡の雨落溝のように見えるが、周辺にそのような建物跡は確認できなかった。また、S D 80 東側の南壁面付近に、S D 80内の石より一回り大きな、直径30cm前後の石が2個並んでおり、その対向する壁面付近に、長さ20cm程度のやや大きめの石を配している。この溝跡の性格は、不明である。

S K 38 (第26図) 平面形状が、直径約3.4mの円形で、深さが48cmの土坑である。土坑の北東隅に、4～32cmの石が集中する。室町時



第24図 S D 01 (1/80)

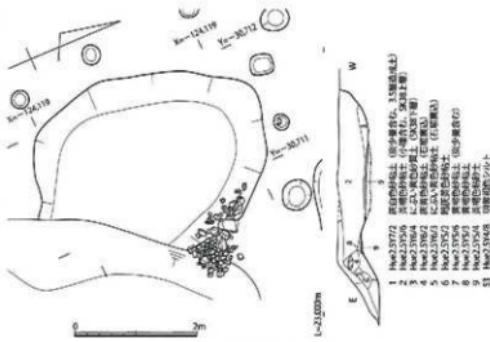


第25図 SD 80 (1/50)

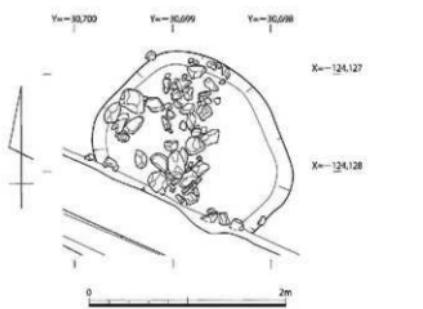
代後期の遺物が出土した石垣の裏込土を、SK 38 が切っているが、室町時代後期の造成土が SK 38 を覆っている。室町時代後期の短期間で SK 38 が形成され、埋没したことうかがえる。出土遺物は、土師器の羽釜、瓦器塊、瓦などが出土しているが、石垣の裏込土内から出土した土師器の年代よりも古い 15世紀後半までのものである。

S K 39(第27図) S K 46 北東で、直径約 2m、深さ約 25cm (第5図第35層) の土坑を確認した。埋土内には、5~30cmの石を多く含む。SD 80 及び SK 46 は、SK 39 と距離的に近く、同様に石を多く含む遺構であるため、何かしら関係があるものの可能性があるが、これらの用途は分からなかった。

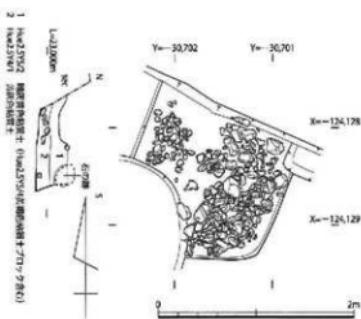
S K 46 (第28図) 一辺約 1.5m の平面形状が正方形に近い土坑であり、深さは約 30cm である。SK 46 の第1層直上に 5~25cm の石が敷き詰められるように置かれてい



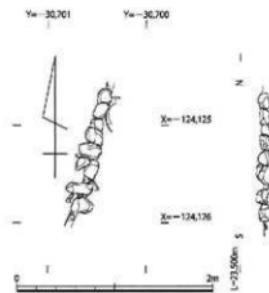
第26図 SK 38 (1/80)



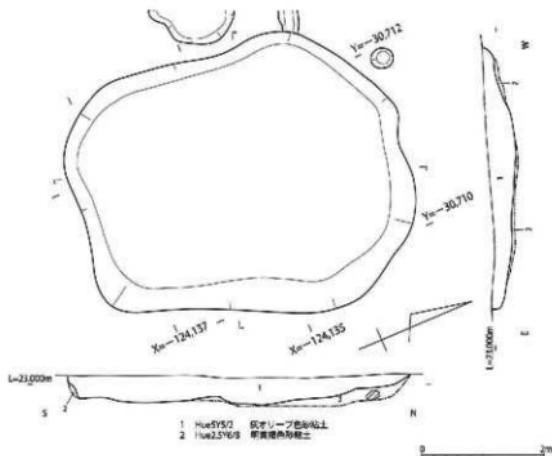
第27図 SK 39 (1/50)



第28図 SK 46 (1/50)



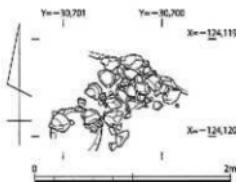
第29図 石列2 (1/50)



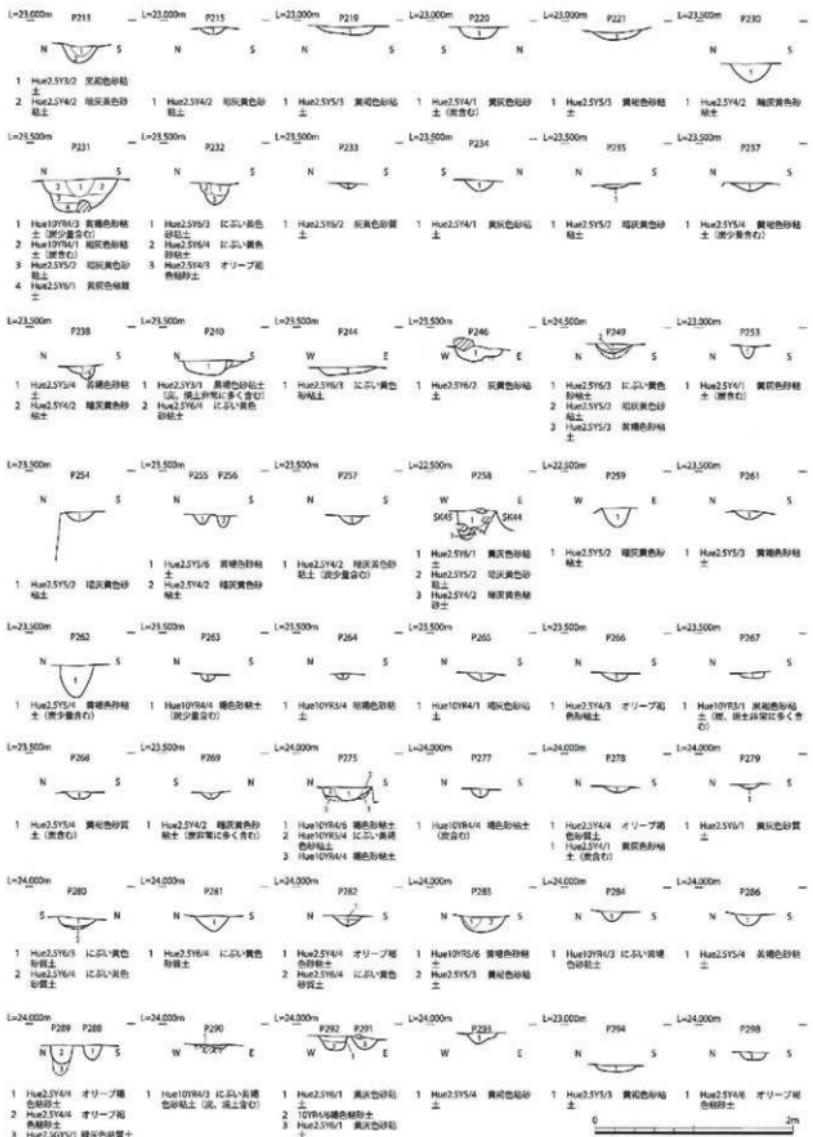
第30図 SX 04 (1/80)



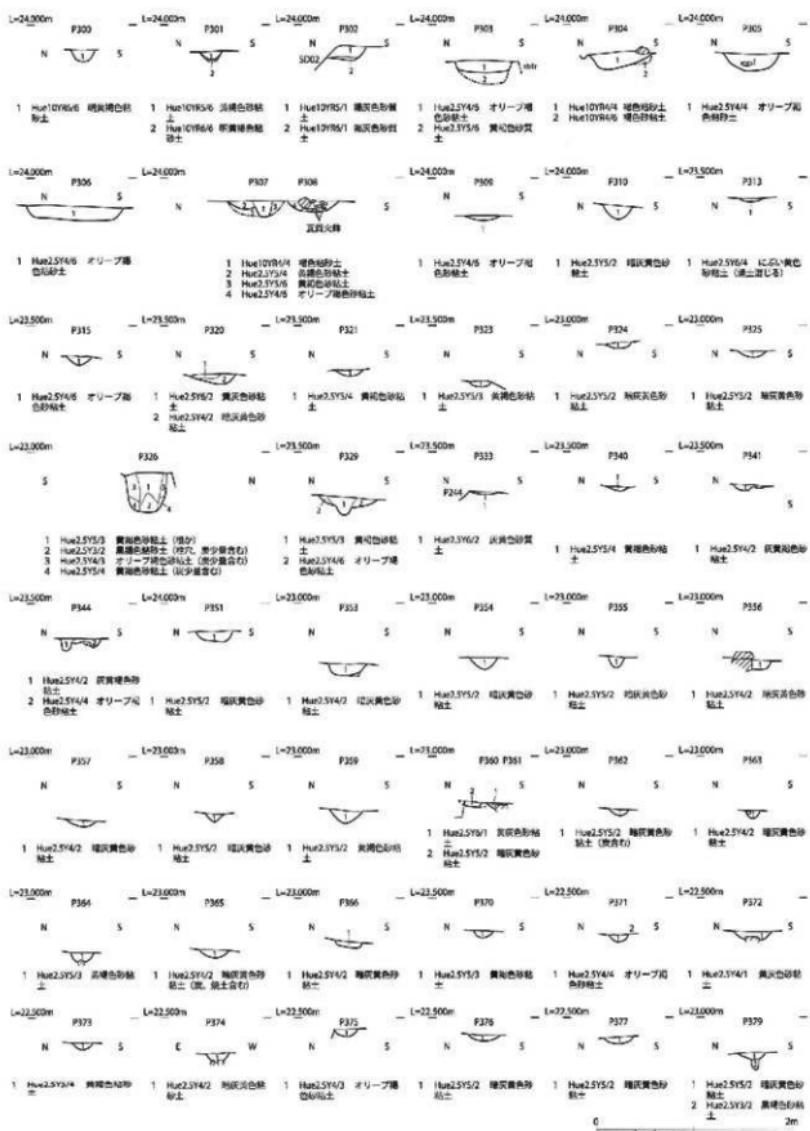
第31図 SX 15 検出状況写真 (東から)



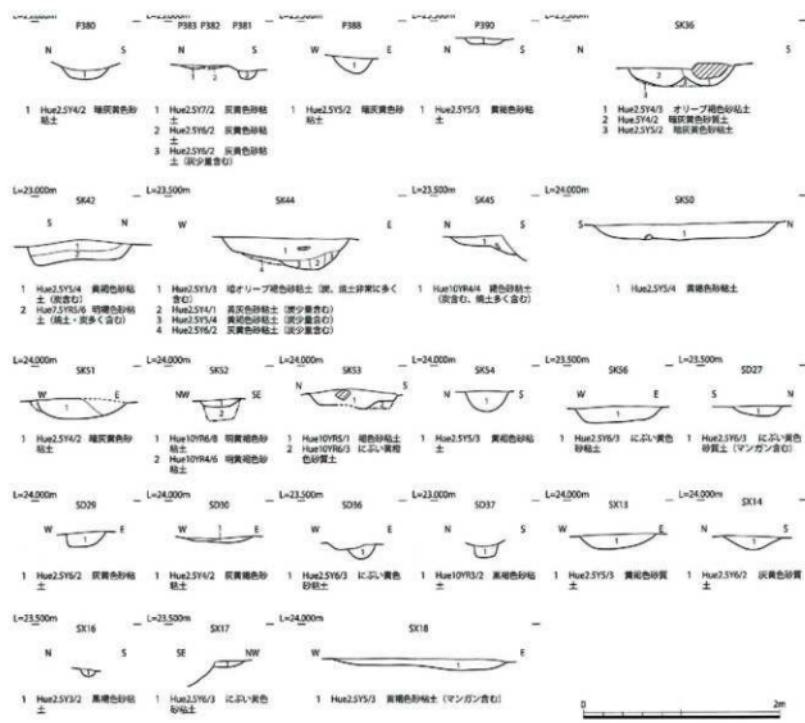
第32図 石塗り (1/50)



第33図 第2構造面構造断面図1 (1/50)



第34図 第2選構面透構断面図2 (1/50)

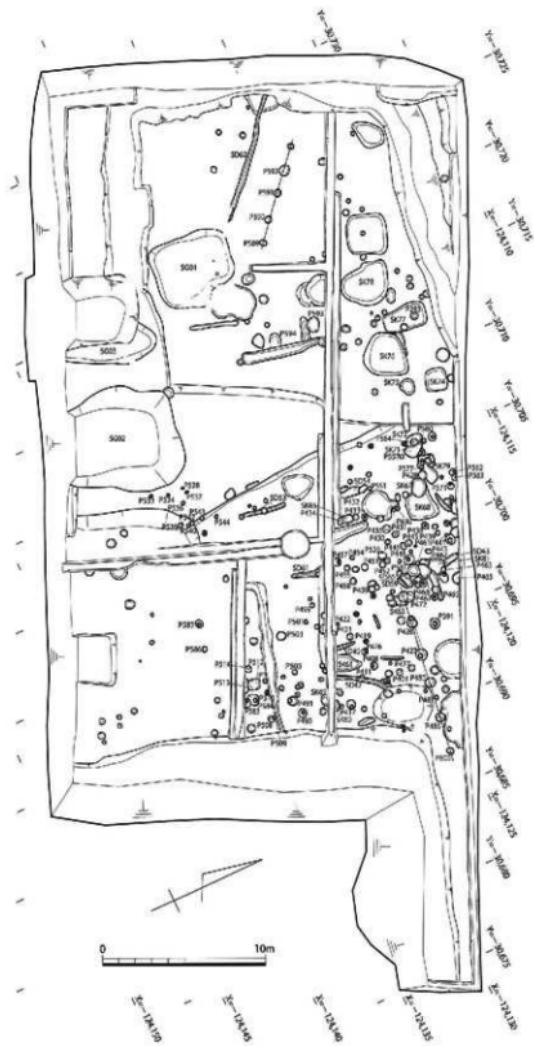


第35図 第2造構面造構断面図3 (1/50)

るが、その用途は不明である。SK 46は、局所的な地業や礎石を据えるための根石などの可能性があるが、礎石などの存在は確認できなかった。約60cm南にSD 80が存在するが、SD 80をSK 48に関連する施設の雨落溝とするには距離が近すぎるものと思われる。

石列2(第29図) 12~27cmの石を8個並べて配置しているものである。この石列2の並びは、南北の正方位から20度振る。今回の調査地は、西側が高い傾斜地であるが、石列2の西側のSD 01までの約6.5m間は平坦であり、東側は緩やかに下っていく。西側の平坦面の土が流れ出さないようにするための土留めと区画を明示するための石列であろう。第1造構面で検出した石列1は、石列2より1石分西側であるが、中心軸の方角が同一であり、石列2を、石列1に設置し直していることがうかがえる。石列2の残存長は1.3mであるが、少なくとも平坦面と斜面の境が直線的に続く約4.5mは石列が続いていたものと思われる。

S X 04(第30図) 平面形状が長径約5.5m、短径約4.3mの橢円形を呈し、深さが46cm



第36図 第3階構面平面図 (1/300)

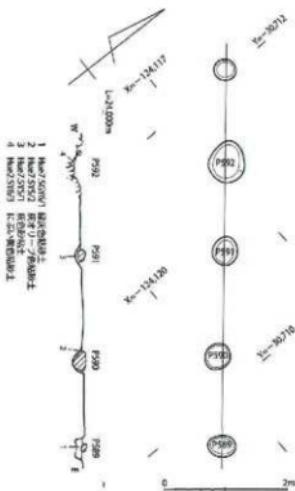
の大きな土坑である。土師器や国産陶器、平安時代末～鎌倉時代前半の瓦、室町時代後半の瓦などが出土しており、室町時代後半以後に埋没したことが分かるが、その用途は不明である。第3遺構面のSG 02の位置と重なることから、SG 02埋没後に、SG 02の位置が陥没し、土坑状に見えている可能性もある。

S X 15（第31図）底が無い瓦器の羽釜を地中に埋め、その中央付近に土師器の皿を置いた遺構である。瓦器の羽釜や土師器皿の年代から、15世紀後半の年代を与えることができる。羽釜・皿ともに、口縁部側が上に置かれ、ほぼ完形のまま出土していることから、人為的に埋められた可能性が高いものと考えるが、これらを埋めた意図は不明である。地鎮などの祭祀に関わるものであろうか。

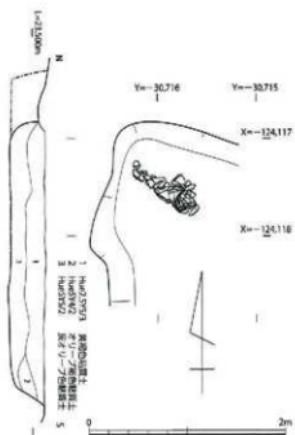
石溜り（第32図）調査区北壁付近で、6～24cmの石が集中している場所を確認した。この石の集中している場所の周囲に、掘形などは確認できなかった。この石溜りの性格は不明である。石溜りは、西側の平坦面と東側の傾斜地の境界上に広がっている。上述のように、石列2は、西側の平坦面と東側の傾斜地の境界部分に置かれ、土留めや区画を示すものかと考えられるが、石溜りも、これらに関係したものである可能性がある。

第3節 第3遺構面

P 589～592（第37図）直径35～55cmのピットが4基並ぶものであるが、北西のやや不明瞭なピットも加えると5基並ぶこととなる。P 589～P 591内には、礎石となるような上面に平坦面を有する石が存在しており、P 592内には、礎石を据えたであろう根石のような石が確認できた。北西のピット～P 592間、P 592～P 591間、P 590～P 589間は約1.5mであるが、P 591～P 590間は約1.8mである。P 589～592と平行するようなピットの列は確認できなかったため、建物跡ではなく、柵などの施設を想定しておくこととする。



第37図 P 589～P 592 (1/80)



第38図 SK 78 遺物出土状況 (1/50)

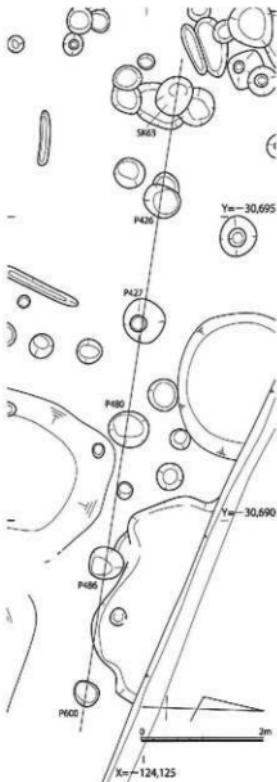
S K 63・P 426・P 427・P 480・P 486・P 600（第39図）第3遺構面の調査地東側

において多くのピットを確認しているが、列として並ぶのは、これらの遺構しか確認することができなかつた。直径は40～70cmのピットや土坑であるが、礎石の存在は確認できなかつた。また、SK 63～P 426 間が 1.85 m、P 426～P 427 間が 2.05 m、P 427～P 480 間が 1.75 m、P 480～P 486 間が 2.35 m、P 486～P 600 間が 2.05 m と、それぞれの間隔に違いが見られる。平行する列をもつ遺構も確認できていないため、柵などの可能性があることを言及するにとどめておく。

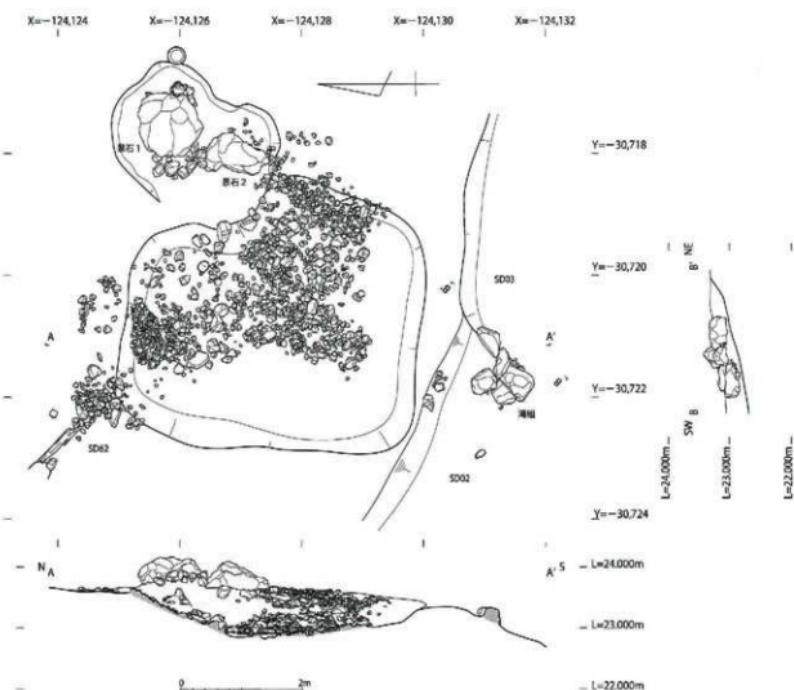
S K 78 (第 38 図) 長径 2.9 m、短径 2.6 m、深さ 35 cm の土坑である。SK 78 内の北側において、平安時代前期の土師器の甕 3 点が一列に並んで出土した。北西から南東方向に並んでおり、北西隅の甕の口縁部と中央の甕の底部が連結するように置かれているが、南東隅の甕は逆方向を向いており、中央の甕と口縁部同士が接している。甕の内部から出土遺物もなく、人為的に配置されたものかどうかは不明である。

S G 01 平面形状が、南北幅約 4.8 m、東西幅約 4.4 m の隅丸方形の池であり、築造から室町時代後期までの間に、一度大きく改変されていることが明らかになっている。築造時～改変を受けるまでのものを第 I 期、改変後のものを第 II 期と称することとする。

S G 01 第 II 期 (第 40 図) 池の北東側の側面・底面に 10～40cm の礫が貼り付けられている状況を確認したが、南西側の側面・底面には、礫敷きを確認できなかつた。全面に貼られていた礫が、北東側のみ残存した可能性もあるが、礫敷きを確認した場所の対角付近に S G 01 の注水口である SD 62 が存在することから、水の勢いが強い場所に護岸的に礫が配置されている可能性も考えられる。この礫上から、土師器・瓦器・国産陶器・瓦など室町時代後期～江戸時代初期の遺物が多く出土している。この礫の直下は泥層 (第 41 図第 14 層) であり、しっかりとした裏込めなどは行われず、堆積した泥の上に、そのまま礫が置かれている。この泥層除去面の S G 01 中央付近に、室町時代後期の火鉢が据えられている状況を確認した。この火鉢の年代と礫上の遺物の年代差がほとんどないことから、第 II 期への整備後、短期間で廃絶したものと考えられる。



第 39 図 SK 63・P 426・P 427・P 480・P 486・P 600 (1/80)

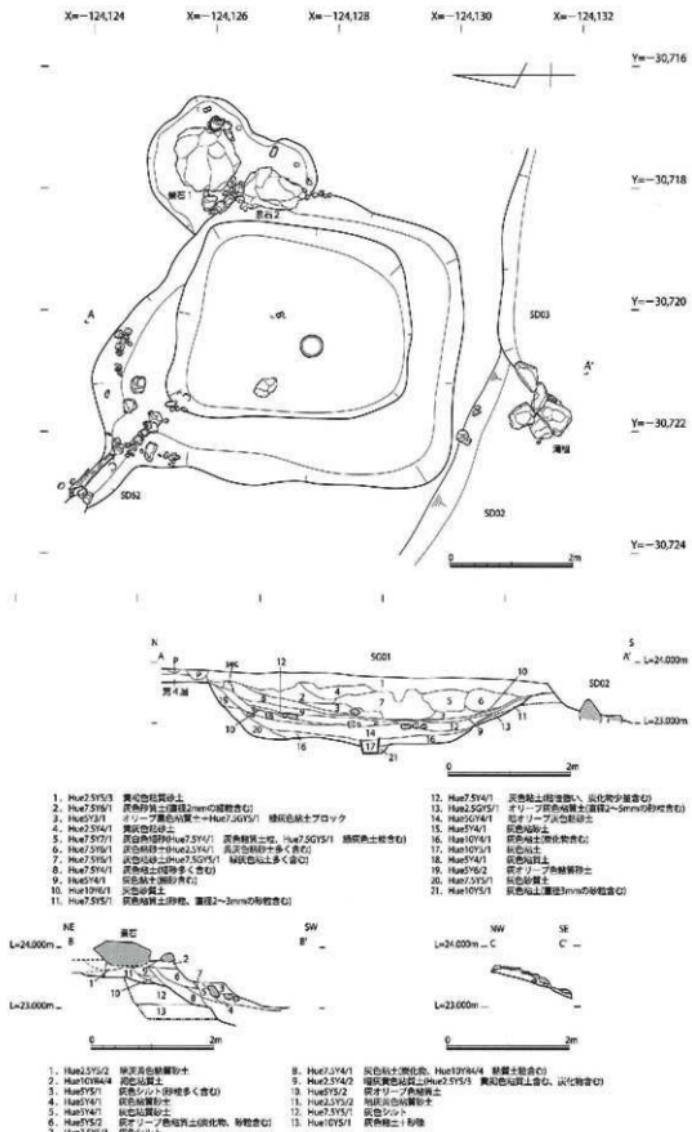


第40図 SG 01 第Ⅱ期 (1/80)

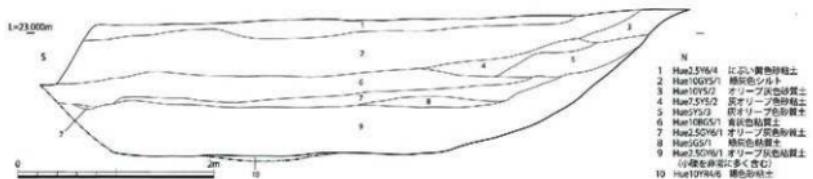
北西から南東に走る S D 62 が、 S G 01 の北西で接続する。西の山側から S G 01 に水を流し入れるための溝と考えられる。S D 62 から池への注水口付近を覆うように、側面や底面と同様の礫が多く置かれていることから、第Ⅱ期の溝は暗渠であった可能性がある。また、注水口から約 60cm 南西では、溝の北壁に沿うように、木の板が 1 枚出土した。木樋の一部の可能性があるが、出土したのはこの 1 枚だけであり、詳細は不明である。また、この木片が、第Ⅰ期に伴うものか、第Ⅱ期に伴うものかも不明である。

S G 01 北東岸に沿うように 2 個の巨石が配置されており、北側の景石 1 は直径約 1 m の円形、南側の景石 2 は長辺約 1 m 、短辺約 60cm の平面形状が長方形のものである。2 個とも、丹波帶産のチャートであり、景石として配置されたものと考えられる。この 2 個を据える際の掘形内から室町時代後期の遺物が出土しており、第Ⅱ期に据えられたものであることが分かつた。

S G 01 から約 1 m 南の位置では、長辺約 40 ~ 60cm の石が 5 つ並べて配置されている状況



第41図 SG 01 第一期 (1/80)



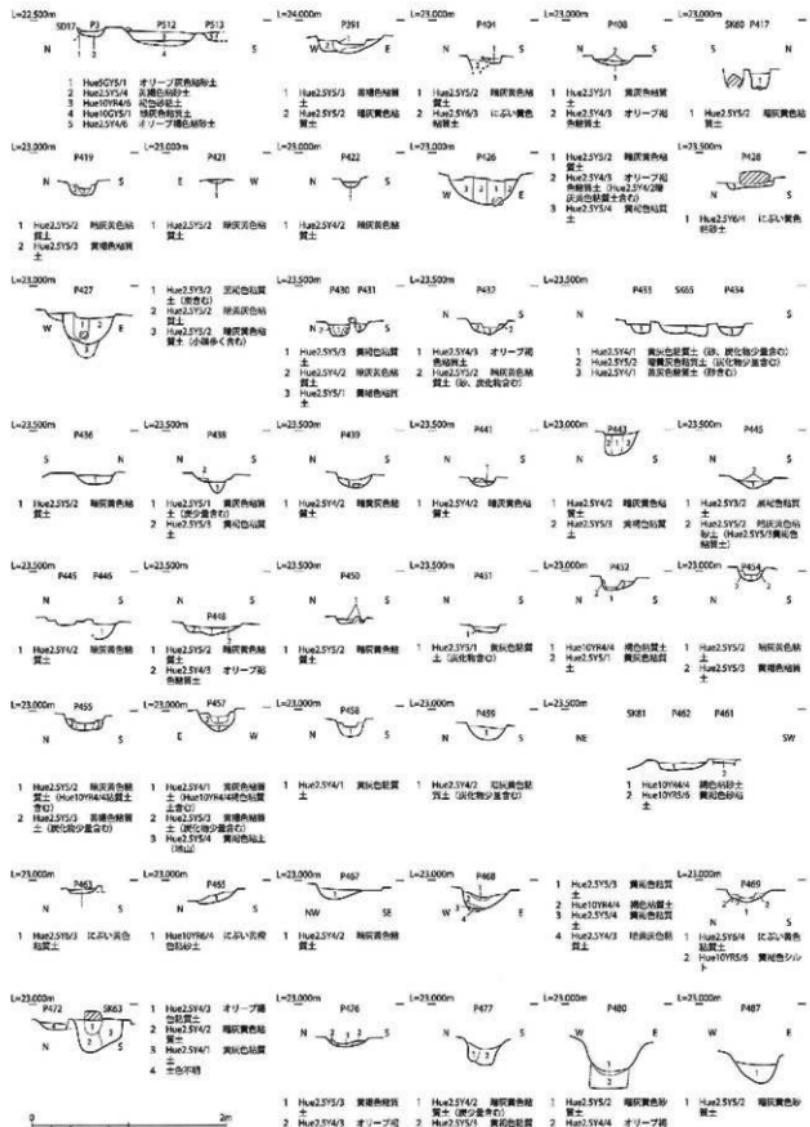
第42図 SG 02 アゼ断面図 (1/50)

を確認した。SG 01の側壁の高さに明確な差はないものの、南側壁がやや低くなっている。北西の溝から注がれた水が溜まりすぎた際には、SG 01南側から溢れ、並べて配置された石の間を流れ、南東に位置するSG 03に流れ込むものと思われる。南西端の2個は、上面に平坦な面が来るよう並べられていることから、この南西端の2個の上を水が流れよう配置されていることがうかがえる。これらの並んだ石は、庭園の滝組と呼ばれる構造物であろう。この滝組が、第Ⅰ期に据えられたものなのか、第Ⅱ期以後に据えられたものであるのかは不明であるが、貞応元年～元仁元年（1222～1224）に造営された西岡寺北山第安民沢に、この滝組の類例がある。ただし、安民沢の滝組には、西浦門前遺跡で検出した滝組の南西端の2石の外側に、更に1個が配置される。西浦門前遺跡の滝組も、かつては据えられていたものが抜け落ちた可能性があったため、南西端付近の精査を繰り返したが、明確な抜き取り痕跡や掘形は確認できなかった。

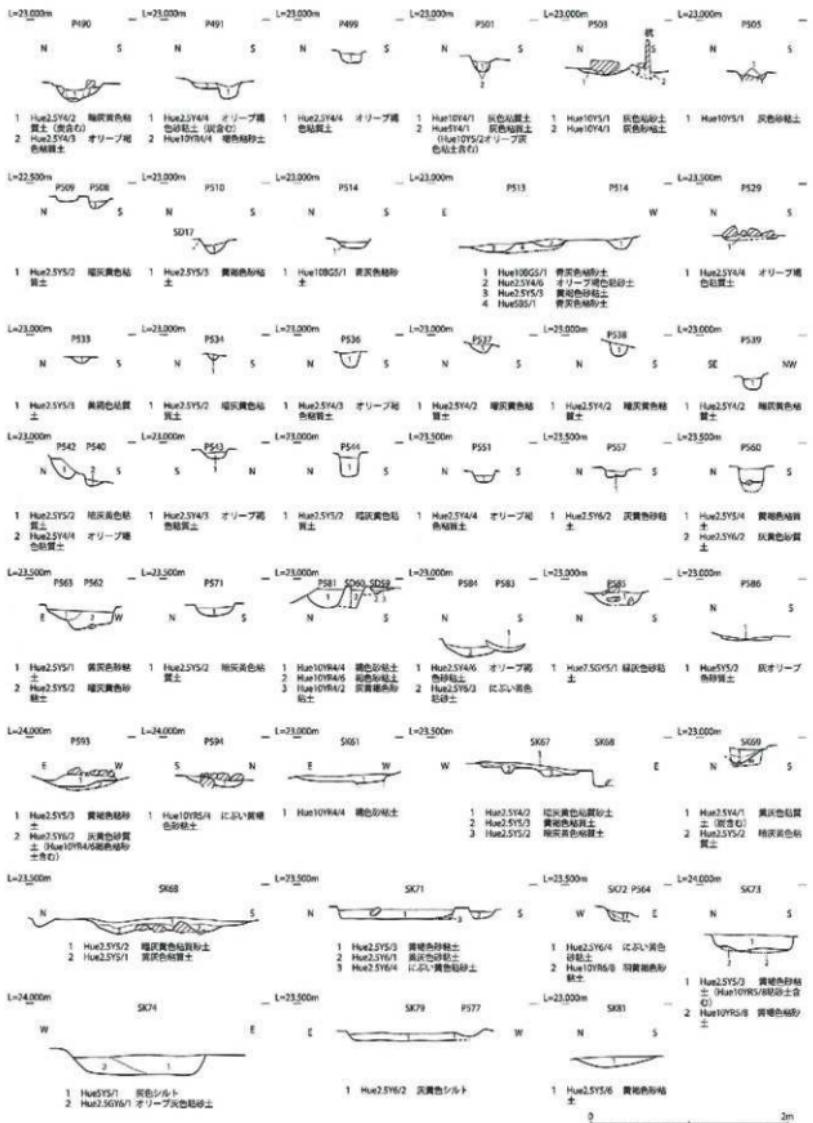
SG 01 第Ⅰ期（第41図） 第Ⅱ期の埋土を全て除去すると、底面・側面が砂利となり、初期のSG 01は、素掘りの池として築造されたことが分かる。深さ75cm前後でテラス状の中段を造り、最も深い場所は約1.1mを測る。SD 62の池への注水口付近の礫敷きや泥層を除去すると、SD 62が注水口付近でハの字状に開き、その両壁に11～24cmの石が護岸として貼り付けられる。第Ⅱ期の礫敷きより下層からは、出土遺物がなく、遺物の年代から第Ⅰ期の築造年代を探ることはできないが、滝組の類例である安民沢の年代から、第Ⅰ期の築造年代も鎌倉時代前半頃と考えておく。景石1・2については、第Ⅱ期に据えられたことは明らかであるが、第Ⅰ期から存在したものを探してみると、第Ⅰ期に新たに据えられたものであるかは不明である。

【参考文献】

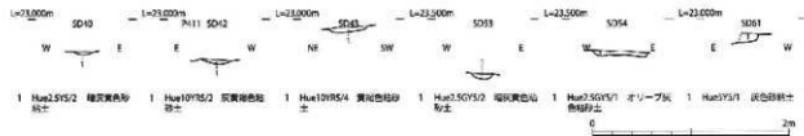
鹿苑寺『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 平成9年



第43図 第3構造面透視断面図1 (1/50)



第44図 第3遺構面構造断面図2 (1/50)



第45図 第3遺構横面遺構断面図(1/50)

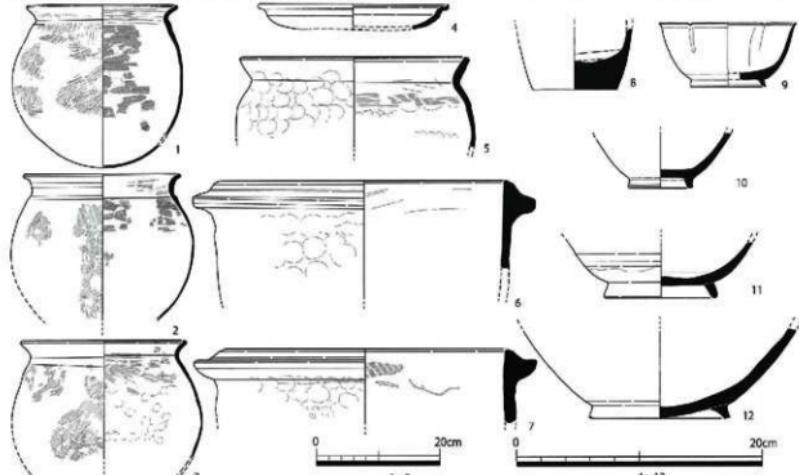
第5章 出土遺物

今回の調査では、平安～江戸時代にかけての遺物が出土している。調査地のほぼ中心に走る鎌倉時代のSD01からの瓦類が出土遺物の大半を占めており、総コンテナ数の70%を占める。次いで多い土器・陶磁器類では、土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器等があり、少數ではあるが、石造物や石製品も出土している。輸入品では、鎌倉時代の青磁天目台や青白磁壺(梅瓶)等、室町時代では、国産の鉄釉天目茶碗や灰釉花瓶等、水無瀬離宮の特別な性格を示す希少遺物が含まれている点は、注目される。以下では、図示した遺物を中心に概述する。

第1節 土器・陶磁器類

(1) 平安時代の遺物(第46図、図版9)

1～3は、SK78から出土した土師器甕で、内外面にハケメを残すが仕上げが良く、8世紀末から9世紀前半頃まで、5は新相を見せ10世紀頃のものとみておく。4の土師器皿Aは、薄手で口縁部が強く屈曲する。6・7の土師器羽釜は、短く厚い鍔部が口縁端部近くに付く特徴的な形態を呈する10世紀後半頃の摂津産である。8・9は綠釉陶器で、8は壺底部、軟質

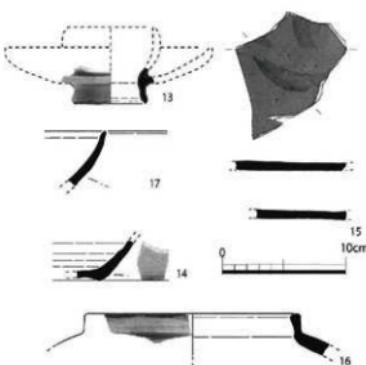


第46図 出土遺物1(1/4・1/8)

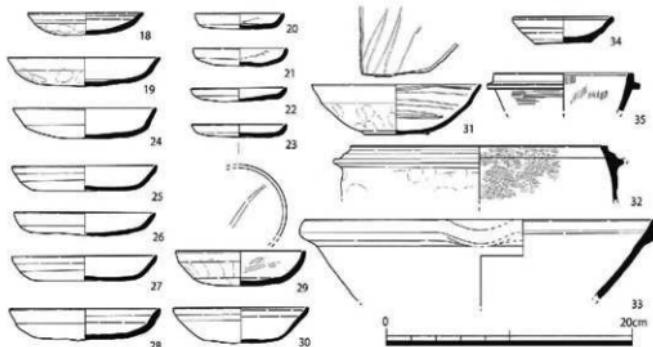
で淡緑色を呈する9世紀代の山城産である。9は輪花楕で軟質、釉はやや濃い緑色で美濃産とみておく。10は須恵器壺底部で9世紀頃、11は灰釉陶器碗の底部で、内面に平滑な使用痕跡が見られ、転用窯か。SD 02への混入品であるが、10世紀頃と思われる。12は、高台が付く須恵器鉢底部である。10世紀から11世紀頃で収まる。

(2) 鎌倉時代から南北朝期の遺物(第47・48図、図版9・10)

12世紀末から13世紀頃までの中国からの輸入陶磁器をまとめた。13は、高台と皿部及び受け部下端の特徴的な形態から、青磁の天目台と分かる。14は、唐子文の青白磁壺(梅瓶)底部である。他にも破片7点が出土し、うち1点には唐子の足部分が残る。両者ともに鎌倉や韓国的新安難破船から類品が出土している。15・16は中国河北省の磁州窯産で、15は鉄絵盤の底部片である。16は、短頸壺の口縁部で、白地に鉄絵で文様が描かれている。17は、P 372から出土した鉄釉天目茶碗片である。13の青磁天目台とともに、この地に喫茶文化が及んでいたことを示す確かな物証である。水無瀬離宮とその主たる後鳥羽上皇等に直接関連する考古学的資料であるとみて大過ないだろう。第48図の18～30は土師器皿大小で、20～30はSD 01から出土しており、これらは、楠葉産を中心とし、28など13世紀代からの古手混入品を少數含むが、他は14世紀代のものが主体を成す。18・19も28同様に13世紀代以前のものである。31は瓦器塊で、暗文・ヘラミガキとも隙間が大きくなっている。32は



第47図 出土遺物2 (1/4)

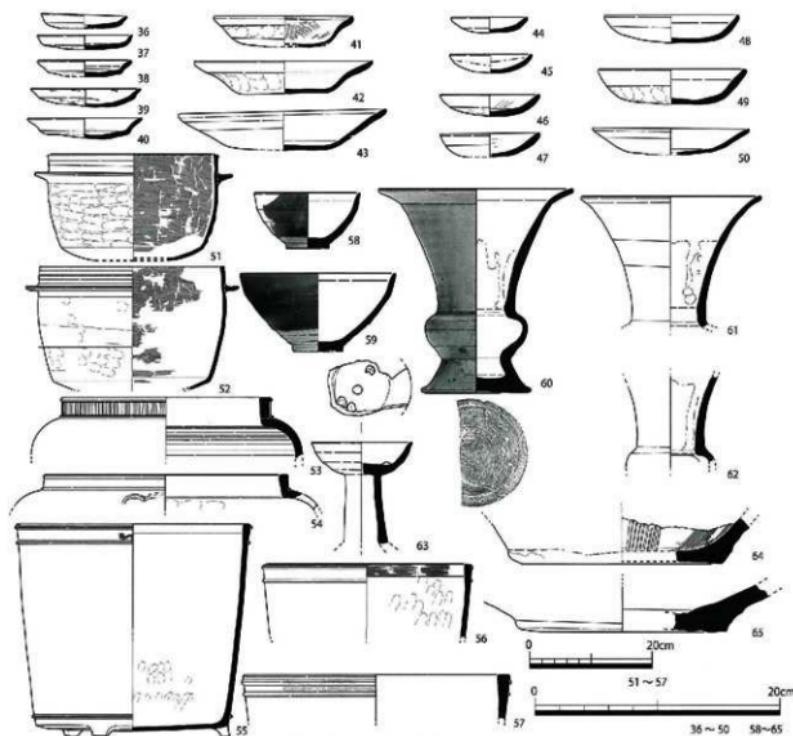


第48図 出土遺物3 (1/4)

瓦器羽釜で、鋸部は短く、口縁部を内傾気味に収めている。外面には、使用痕のススが付着する。33は東播系の須恵器片口鉢で、口縁部が三角玉縁状に発達している。34は須恵器の小皿で、これも東播系とみている。これらの遺物は、14世紀の古い方を中心に位置付けておく。35は、SK 06から出土した滑石製の小石鍋で、長崎産である。13世紀代の搬入品であろう。

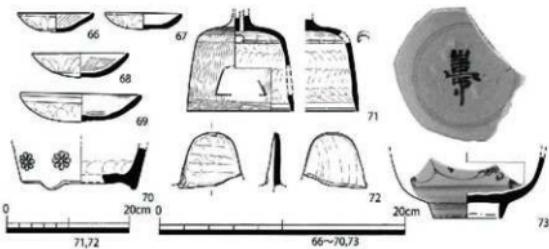
(3) 室町時代後半期の遺物（第49図、図版10～12）

36～50は、土器師皿である。楠葉産が大半を占めるが、42・43・50は京都産である。36～43は15世紀後葉、44～50は16世紀中葉頃前後とみておきたい。51～57は、瓦器である。51・52は羽釜であり、製作技法痕跡等からは楠葉産とみられ、鋸部に幅を残す点から、古い15世紀後葉側の土器師皿に共伴してよいものである。53・54はほぼ同形態の火鉢であるが、54には扁平な圓形から見られるスカシ部が残っており、茶道具の土風炉とみておく。55～57は大小あるが、深い鉢状を呈する火鉢であろう。これらの瓦器の火がらみ品



第49図 出土遺物4 (1/4 · 1/8)

は、外面丁寧なヘラミガキで仕上げられた大和産とみており、16世紀代に位置付けておく。55はSG 01の最下層部に据えられており、SG 01がこの頃に改変が加えられたことを示す。58・59は、瀬戸美濃



第50図 出土遺物5 (1/4・1/8)

産の鉄釉の天目茶壺であり、ケズリ出し高台で、口縁部が少し外反的に立ち上がるいわゆる天目形を呈する。天目茶壺は、室町時代の喫茶の中心的茶壺である。15世紀後半から16世紀初頭頃までとみておきたい。60～62は瀬戸美濃産の灰釉陶器の仏花瓶で、60は底部に糸切痕が残る。15世紀後半から16世紀前半頃までのものである。63も瀬戸美濃産の灰釉陶器の燭台で、受け部中央に小さい穿孔がある。いずれも寺院等で使用される資料である。64・65は焼き締めの陶器で、64は備前の擂鉢。内面の摺目は一単位約10本目であり、擂目間が広い。65は、信楽の壺の底部である。両者ともに、15世紀後葉から16世紀前半頃までのものであろう。

(4) 江戸時代の遺物 (第50図、図版12・13)

ほとんどがSG 01から出土した遺物である。66～69は土師器の皿で、口径は5.8～9.8cm、内面にハケメを残すものがある。70は瓦器の香炉で、外面はヘラミガキを施し、菊の小紋を押印している。71・72は小振りの瓦燈で、同一個片であろう。71はつまみの欠損した蓋部であり、72は下の鉢の風よけ部である。外面のヘラミガキは丁寧で、香炉とともに大和産かとみている。73は染付磁器の塊であり、呉須の色調等から明末の輸入品とみている。ここに示した遺物は、16世紀末から17世紀前葉頃までに位置付けられる。

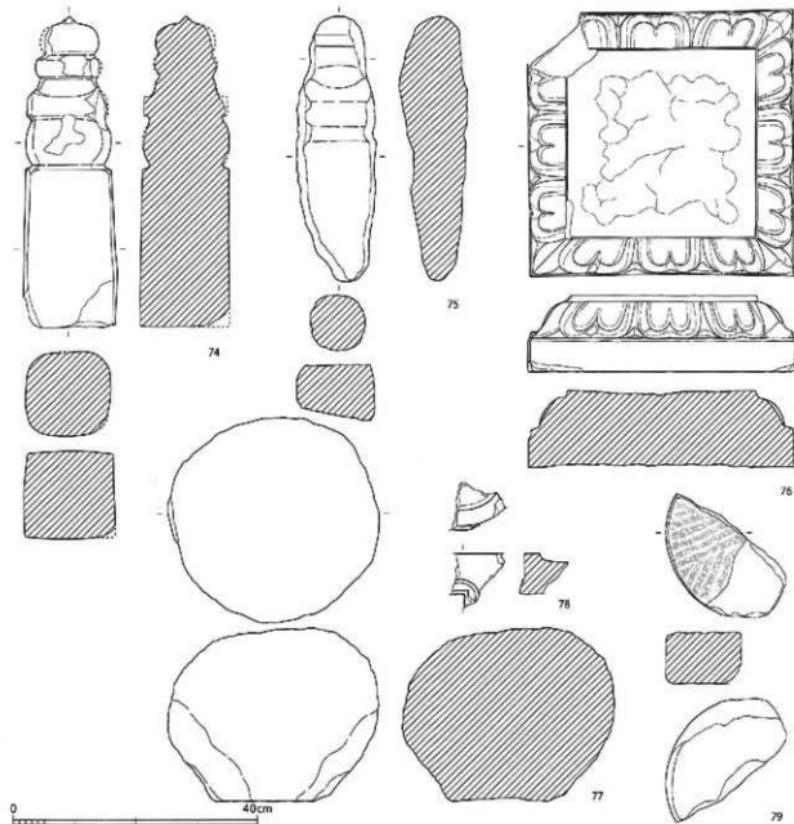
第2節 石造物 (第60図、図版13)

出土した石造物は、五輪塔と台座、そして、石臼である。五輪塔には、組合式のものと一石五輪塔の2種類がある。74・75は一石五輪塔で、74の底部は平坦で自立タイプ、梵字の有無は摩滅が激しく不明である。75の地輪下部は欠損しており、底面の状態は不明である。76は、組合式五輪等の水輪部分である。いずれの石材も花崗岩で、風化が進んでいる。77は宝篋印塔の台座で、四面に反花が施される反花座である。平面は正方形で、ホゾは施されず、裏面は平滑である。底部を上にして据えられた状態で出土しており、礎石や庭の踏み石のような形で使用されていた可能性がある。石種は花崗岩。78・79は石臼の一部で、78は輝緑石と思われる茶臼で、引手の差し込み部分が見える。79は、引き手部分等の痕跡がなく、上下どちらか

は不明である。

第3節 瓦

今回の調査で最も多く出土した遺物が瓦であり、総重量は、約 243kg を量る。その内訳は、軒丸瓦 210 点、軒平瓦 155 点、丸瓦 597 点、平瓦 1,657 点、道具瓦 18 点であるが、平瓦・丸瓦の中には、小破片であり、軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦と判別できなかったものも含まれるとと思われる。瓦の大半は、S D 01 から出土した平安時代末～鎌倉時代前半に属するものであるが、調査地全域から鎌倉時代後半に属するもの、S G 01 から出土した室町時代後半の瓦も出土している。



第 51 図 出土遺物 6 (1/8)

(1) 軒丸瓦(第52図、図版14・15)

軒丸瓦は、巴文を第1型式、宝相華文を第2型式、蓮華文を第3型式、文様不明のものを第4型式と4型式に分類した。

第1型式は、6種確認した。第1型式第1種(80)は、1個出土した。巴頭が尖り、明確なくびれを有しない右三つ巴文であり、疎らな大きい珠文が5つ残存する。巴文と珠文の間に、圏線は存在しない。外区は未調整であり、瓦当裏面は指頭圧痕を顕著に残す。被熱し、内外ともに赤橙色を呈す。第1型式第2種(81)は、1点出土した。尾が太い巴文である。文様面の多くを欠いており、巴の数、巻きの方向ともに不明である。疎らな大きい珠文が3個残存する。圏線は存在しない。摩滅が著しく、調整は判別することができない。表面に焼しがかかる。第1型式第3種(82)は、1点出土した。明確なくびれを有しない左巴文であり、疎らな小さい珠文が2個残存する。圏線は存在しない。小破片であり、巴の数、調整は不明である。第1型式第4種(83)は、1点出土した。尾が太く、巴頭が円形で大きく、明確なくびれを有する左巴文であり、疎らな小さい珠文が4個残存する。小破片であり、巴の数、調整は不明であるが、丸瓦部の角度から鳥食と考えられる。第1型式第5種(84)は、2点出土した。巴頭が尖り、明確なくびれを有しない左三つ巴文であり、密な小さい珠文が16個残存する。巴文と珠文の間に圏線は存在しないが、珠文の外側に圏線を有する。外区は残存せず、調整は不明であるが、瓦当裏面は、平滑にナデで調整している。焼成は、須恵質である。第1型式第6種(85)は、1点出土した。左巴文であり、密な小さい珠文が11個残存する。小破片であり、巴頭の形状、巴の数は不明である。珠文の内外に圏線を有する。外区は未調整であり、瓦当裏面は残存せず、調整は不明である。焼成は、須恵質である。

第2型式は、1種確認した。第2型式第1種(88)は、1点出土した。木瓜文のような文様であり、密な小さい珠文が6個残存している。外区は、未調整であり、瓦当裏面は、残存部分が少なく、調整は不明瞭であるが、明確なナデは確認できず、平滑に仕上げる意識が乏しいものである。広瀬遺跡から、同範品が出土しているが、製作技法も広瀬遺跡のものと同様ならば、瓦当裏面には指頭圧痕を顕著に残すものである。

第3型式は、2種106点出土しており、第1種(86・90)が80点、第2種(87・91)が26点である。第1種・第2種とともに、小さな中房の中に、反転した「卍」のような文様を配した8弁の複弁蓮華文である。2種ともに、疎らな小さい珠文を巡らせるが、第1種は珠文数が12個であるのに対して、第2種は16個と数が異なる。調整は2種共通しており、外区は未調整であり、瓦当裏面には指頭圧痕を顕著に残し、丸瓦部凸面には網タタキ痕が残る。

第4型式は、1種3点出土している(89)。珠文帶のみ残存しており、文様は不明である。密で、低い珠文が3個残存しており、珠文の内側には圏線又は巴文の尾が存在する。表面は強い焼し

がかかるており、胎土は非常に精緻である。

(2) 軒平瓦(第53図、図版15・16)

軒平瓦は、剣頭文を第1型式、剣巴文を第2型式、剣頭文に菊花のような中心飾を配したものを第3型式、均整唐草文を第4型式に分類した。

第1型式は、7種確認した。第7種(98)が1点である。第1型式第1種(92)は、49点出土した。8弁の陰刻の剣頭文であり、向かって左端の剣頭の左上隅の範が欠けているものである。第1型式第2種(93)は、18点出土した。7弁の陰刻の剣頭文であり、文様面に布目痕を残し、折り曲げ技法によって製作されたことが明らかなものである。第1型式第3種(94)は、1点出土した。文様面は、向かって右半分しか残存しておらず、右側の4弁しか確認できていないが、8弁の陰刻の剣頭文と考えられる。第1型式第4種(95)は、1点出土した。上下の幅が狭い陰刻の剣頭文である。文様面は、3弁分しか残存しておらず、総弁数は不明である。第1型式第5種(96)は、1点出土した。大きな弁を有する陰刻の剣頭文であるが、文様面は向かって左端の2弁分しか残存しておらず、総弁数は不明である。他の第1型式・第2型式・第3型式の軒平瓦の平瓦凹面の布目痕が比較的粗いのに対して、第1型式第5種と第1型式第6種のみ布目痕が比較的密である。第1型式第6種(97)は、1点出土した。大きな弁を有する陰刻の剣頭文であるが、文様面は向かって右端の3弁分しか残存しておらず、総弁数は不明である。第1型式第7型式(98)は、1点出土した。唯一の陽刻の剣頭文であり、向かって右端から7弁分残存している。断面形状が半円形の丸のような中心飾の左右に6弁ずつ剣頭を配する12弁の剣頭文と考えられる。平瓦部凹面に布目痕は残さない。

第2型式は、2種2点出土しており、第1種(99)・第2種(100)ともに1点ずつ出土している。第2型式第1種は、中心飾の右三つ巴の左右に剣頭を配する剣巴文である。向かって、左側に3弁、右側に2弁残存するが、文様面の法量から、左右に4弁ずつ配したものと推測することができる。平瓦部凹面の布目痕は、比較的密である。第2型式第2種は、左巴の中心飾を有する剣巴文であるが、文様面の残存率が少なく、巴数、剣頭の総弁数は不明である。平瓦部凹面の布目痕は、比較的粗い。

第3型式は、2種確認している。第3型式第1種(101・102)は、57点出土した。7弁の菊花のような中心飾の左右に4弁ずつ剣頭を配するものであるが、向かって右下の菊花の弁の範が欠けている。第3型式第2種(104)は、3点出土した。7弁の菊花のような中心飾の左右に3弁ずつ剣頭を配するものであるが、向かって左上の菊花の弁を分断する線だけ明らかに細く、他の弁とのサイズのバランスが悪い。範を彫り足して、6弁から7弁の菊花にしたことがうかがえる。

第4型式は、1種確認した。第4型式第1種(103)は、7点出土している。U字型の中心

飾の左右に4回反転する唐草を配した均整唐草文である。向かって右端には子葉が付くが、左端には付かず、範が切り縮められていることがうかがえる。焼成は須恵質であり、瓦当裏面には四型整形台圧痕が付く。顎後縁には面取りを施さず、平瓦部凹面には非常に密な布目痕が付く。瓦当裏面に四型整形台圧痕が付くが、顎後縁に面取りを施さないものため、鎌倉時代後半のものと考える。

(3) 丸瓦（第53図）

丸瓦は、第1～3型式の3型式に分類した。

第1型式（105）は、主にSD01から出土した焼成が軟質のものである。丸瓦凸面に繩タタキ痕が残り、明確なナデやケズリの調整は見えない。丸瓦凸面狭端付近に、ヘラ書きが施されているものも存在する。丸瓦凹面には、布目痕を残さない。丸瓦凹面の紐の痕跡が明瞭な部分と不明瞭な部分の比率が、1：1の吊紐痕を有するものも存在する。全長約25cm、広端幅・狭端幅ともに約10cm、厚さ1.3cmと比較的小ぶりな丸瓦である。今回出土した丸瓦の大半が第1型式である。

第2型式（106）は、調査地全域から出土した焼成が須恵質のものである。丸瓦凸面は、タテナデを施し、タタキの痕跡は残らない。丸瓦凹面には、密な布目痕を残す。丸瓦凹面の紐の痕跡が明瞭な部分と不明瞭な部分の比率が、1：4の吊紐痕を有するものも存在する。全体が残存しているものはないが、厚さ2.2cmと第1型式と比べて大ぶりな丸瓦と考えられる。

第3型式（107）は、SG01などから出土している。強い燻しがつき、胎土は非常に精緻なものである。丸瓦凸面狭端付近に細かい繩タタキ痕を残すが、丸瓦凸面は基本的にタテナデにより平滑に仕上げる。丸瓦凹面には、非常に密な布目痕が残る。丸瓦凹面の紐の痕跡が明瞭な部分と不明瞭な部分の比率が、1：4の吊紐痕を有するものも存在する。全体が残存しているものはないが、厚さ1.9cmと第2型式と近い法量の丸瓦と推測できる。

(4) 平瓦（第54図）

平瓦は、第1～3型式の3型式に分類した。

第1型式（108）は、主にSD01から出土した焼成が軟質のものである。平瓦凹面に糸切痕が残るのみで、布目痕や調整の痕跡は見られない。平瓦凸面もユビオサエの痕跡だけが確認でき、他の調整の痕跡は確認できない。全長は約20cm、広端幅約12.5cm、狭端幅約11cm、厚さ1.2cmと比較的小ぶりな平瓦である。今回出土した平瓦の大半が第1型式である。

第2型式（109）は、調査地全域から出土した焼成が須恵質のものである。平瓦凹面はナデにより調整するが、平瓦凸面は糸切痕が顕著に確認でき、調整の痕跡は確認できない。全体が残存しているものはないが、広端幅約15cm、厚さ2.2cmと、第1型式と比べて大ぶりな平瓦と考えられる。

第3型式（110）は、SG 01などから出土している。強い焼しがつき、胎土は非常に精緻なものである。平瓦凹面に非常に密な布目痕が残るが、一部に軽いナデを施す。平瓦凸面は縦方向のヘラナデにより、平滑に仕上げる。全体が残存しているものはないが、厚さ2.05cmと、第2型式と近い法量の平瓦と推測できる。

（5）道具瓦（第54図、図版16）

鳥糞瓦（83）、菊丸瓦（111）、雁振瓦（112）、鬼瓦（113・114）が出土している。また、平瓦第1型式は、胎土・焼成・調整技法から軒平瓦第1～3型式と組み合うものと考えられるが、平瓦第1型式は、軒平瓦第1～3型式と比べて、全長が長く、幅が狭く、規格が異なっている。平瓦第1型式は、熨斗瓦として使用されていたものである可能性がある。

鳥糞は、SG 01から1点出土した。摩滅により、ほとんど焼しは残っていないが、一部に強い焼しが確認できる。胎土は精緻である。菊丸瓦（111）は、造成土内から1点出土した、焼成が須恵質のものである。文様面には、多くの離れ砂がつき、瓦当裏面はナデにより平滑に仕上げる。直径を測ることができる場所は残存していないが、9cm前後になるものと思われる。雁振瓦（112）は、P 41から出土したものであるが、雁振瓦と確認できた14点中12点がSG 01から出土している。焼成は須恵質であり、表面に強い焼しがつく。凸面はナデにより平滑に仕上げられ、凹面は密な布目痕を残す。鬼瓦（113）は、残土中から見つかったものであり、鬼の代わり宝珠が配されたものである。鬼瓦（114）は、SG 01から出土した鬼瓦の足部分である。

（6）まとめ

その法量・胎土・焼成・調整技法から、軒丸瓦第1型式第1～3種、第2型式第1種、軒丸瓦第3型式第1・2種、軒平瓦第1型式第1～7種、第2型式第1・2種、第3型式第1・2種、丸瓦第1型式第1種、平瓦第1型式第1種が、平安時代末～鎌倉時代前半に属するものと考えられる。これらの瓦のほとんどがSD 01から出土しており、築地塀などといった施設で使用されたものと想定できる。

平成20年度の広瀬遺跡の調査で検出した建物遺構の周辺から、同時期の京都の栗柄野瓦窯産の瓦が出土しているが、それらの瓦と法量・胎土・焼成・調整技法が一致し、今回出土した瓦も栗柄野瓦窯で焼かれた製品である可能性が高い。また、軒丸瓦第2型式第1種は、範傷からの同範照合はできなかったが、特徴的な宝相華文であり、平成20年度の広瀬遺跡の報告書で、軒丸瓦第2型式第1種と報告したものと同範品である可能性が高い。

第3型式第1種が80点、第3型式第2種が26点と、この2種で軒丸瓦の大多数を占めており、他のものは、1～2点ずつしか出土していない。軒平瓦は、第3型式第1種が57点、第1型式第1種が49点、第1型式第2種が18点と3種で大多数を占めており、他のものは、

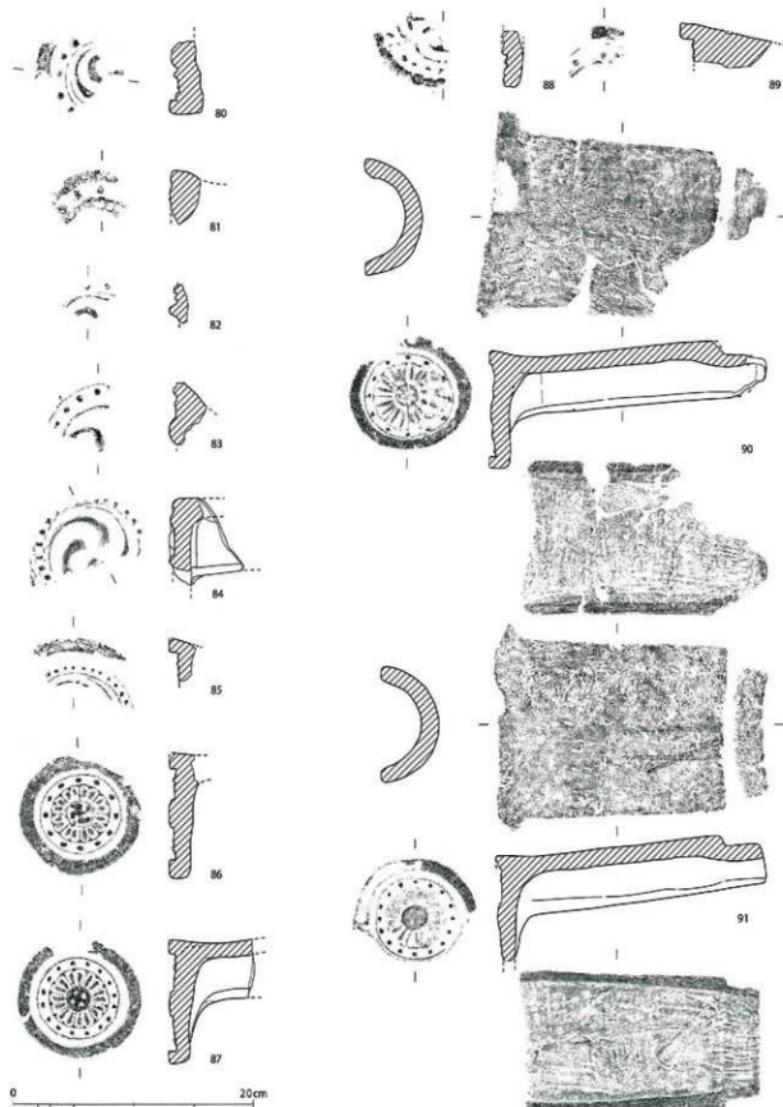
1～3点ずつしか出土していない。通常、最も多く出土した型式の瓦が創建瓦、その他の瓦が修補瓦と推測することが多いが、これらの瓦を水無瀬離宮に関連する施設に葺かれたものと考えると、建保5年（1217）の山上への建て直しから承久の乱までの期間が4年間と短く、修造どころか、建保5年からの建て直しさえ終わっていない可能性が高い。また、院政期の離宮には、同時に様々な文様の軒瓦が使用されていることを考えると、これらの瓦が使用された施設も、軒丸瓦は複弁蓮華文軒丸瓦、軒平瓦は剣頭文軒平瓦という大体の文様の統一を図りながらも、様々な文様の瓦を同時に葺いたものと思われる。

これらの瓦には、ヘラ書きが施されるものがあり、外湾する曲線2本を並べた「)(」のようなものと、直線を交差させた「X」のようなものの2種類が存在し、合計48点を数える。丸瓦凸面狭端付近と軒平瓦の平瓦部凹面に施されるものが多いが、軒平瓦の平瓦部凸面に施されるものも存在する。

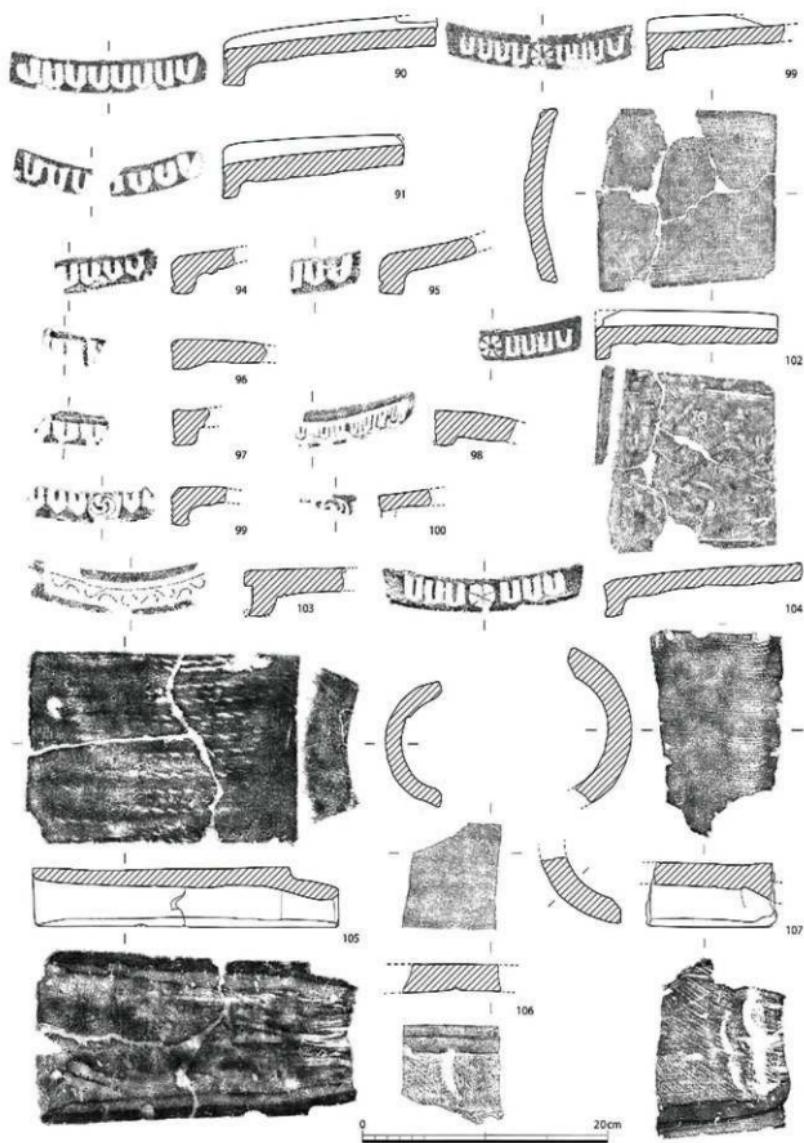
今回の発掘調査で出土した軒丸瓦の点数が210点、重量が約28kg、軒平瓦の点数が155点、重量が約30kgと近しい数値であるのに対して、丸瓦の点数が597点、重量が約54kg、平瓦の点数が1,657点、重量が約127kgと、丸瓦に比べて、平瓦の方が約3倍多い。それぞれの隅の点数も、丸瓦が231点であるのに対して平瓦が688点と、約3倍になる。この数値は、全ての時期の瓦を計測した合計数であるため、平安時代末～鎌倉時代前半の瓦の比率をそのまま示している訳ではないが、この時期の瓦が圧倒的多数であるため、瓦が使用された施設の性格をある程度反映しているものと思われる。また、軒平瓦の広端幅が15cm前後、全長が13.5～17.5cmであるのに対して、平瓦の広端幅が10cm前後、全長が25cm前後と大きく異なる。軒丸瓦や軒平瓦の後ろに、丸瓦や平瓦をつなげていくという本瓦葺の施設ではなく、やはり、屋根の長さは軒瓦の全長程度しかなく、丸瓦と平瓦は棟部分にのみ使用する築地塀などといった施設を想定するべきかと思われる。

他に組み合うものとしては、軒丸瓦が小破片の巴文であり、年代判定は困難であるが、軒丸瓦第1型式第5・6種、軒平瓦第4型式第1種、丸瓦第2型式第1種、平瓦第2型式第1種が須恵質であり、可能性が高い。また、菊丸瓦なども焼成が近く、これらと組み合う可能性がある。これらの年代は、軒平瓦の年代から、鎌倉時代後半と考えておく。

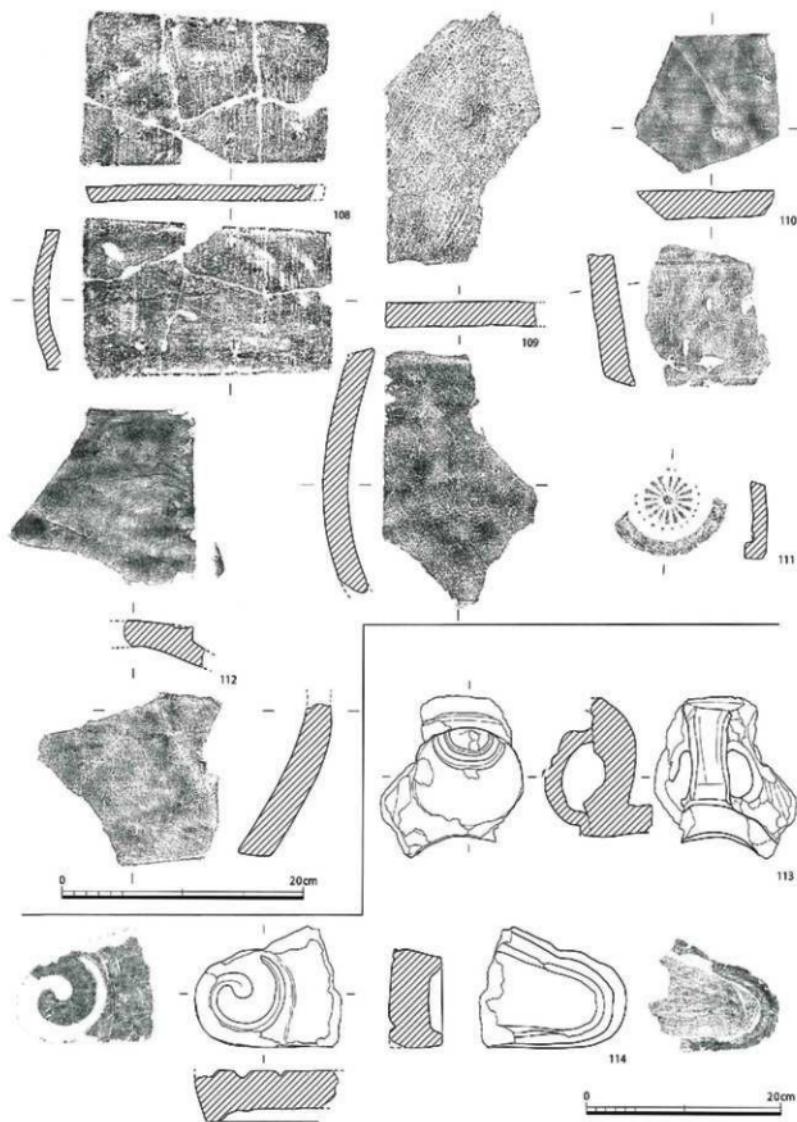
S G 01から多く出土した室町時代後半に属する組合せとしては、軒丸瓦第1型式第4種、第4型式第1種、丸瓦第3型式第1種、平瓦第3型式第1種が挙げられる。軒平瓦に、この時期に属するものは確認できなかった。その他、道具瓦として、雁振瓦（112）や鬼瓦（113・114）などが組み合うものと思われるが、道具瓦に比べて、丸瓦と平瓦の比率が低い。これらの瓦が使用された施設も、本瓦葺の堂塔というよりも、棟部分を瓦で飾るような施設と考えたほうが良いのではないかと考える。



第52図 出土遺物7 (1/4)



第53図 出土遺物8 (1/4)



第54図 出土遺物9 (1/4 + 1/5)

【参考文献】

小森 俊寛 『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 平成17年

第6章　まとめ

第1節　土地利用の変遷

西浦門前遺跡は、平成26年5月22日～6月2日に確認調査を実施し、新たに発見された遺跡である。その範囲は一部桜井遺跡と重なるが、弥生時代～江戸時代の集落遺跡である桜井遺跡とは性格が異なるため、新たな遺跡として登録された。

確認調査の結果から、敷地の南半は粘質土が厚く堆積する湿地性の環境であることを確認したため、敷地の北半を対象として、平成26年6月16日から本発掘調査を開始したものであるが、その結果、当調査地は、平安時代の生活痕跡に始まり、水無瀬離宮に関連すると考えられる庭園跡、防御施設の改変が加えられた可能性のある寺院が続き、その廃絶以降、農地化するという土地利用の変遷をたどることがほぼ明らかとなってきた。以下は、その土地利用の変遷について述べていくこととする。

【平安時代（8世紀末～11世紀）】

調査後の下層確認により、平安時代以前は、調査地のほぼ全域が湿地性の環境であり、水が溜まった地形であることが明らかになった。この地が土地利用されるのは、平安時代のことであるが、平安時代の遺構の数は少なく、第3遺構面のSK78から出土した8世紀末～9世紀前半の土師器の甕から、その時代に属するものであることが知れるくらいである。SK78以外では、調査区北東部の土層が安定しており、少量であるが、平安時代以前の遺物も出土しており、この付近のみ、平安時代以前から人々に土地利用された可能性がある。また、北東部の土層確認を行った際に土坑を確認しており、その埋土から9世紀代の縁釉陶器などが出土しており、当時から、富裕層が当調査地付近の土地利用していた可能性がある。

【鎌倉時代（13世紀～14世紀前半）】

鎌倉時代の遺構は、SD01が挙げられる。このSD01の中心軸は、東2度振るもの、ほぼ正方位の南北方向である。SD01から、瓦が折り重なるように一列に出土しており、築地塀などの施設が存在したことがうかがえるが、明確な築地塀築造のための版築などは確認できていない。築地塀自体の中心軸は、正方位の南北をとっていた可能性もあるだろう。SD01からは、13世紀～14世紀前半の土器類のほかに、輸入陶磁器や瓦といった、当時では宮殿や貴族の邸宅、寺院といった格の高い施設で使用されていたと考えられる遺物が多く出土している。これらの遺物は、火災等のような二次的な火を受けて変色したものが多く、埋土には、

灰・炭、焼土等が入る。SD 01 の検出位置や検出状況及びこのような出土遺物状況からは、SD 01 付近に、瓦を一定量使用するような施設が存在し、それが 14 世紀中頃前後に火災が原因で廃絶したことを示している。

地形の高低差や後世の削平状況、遺構内からの出土遺物の少なさから、SD 01 と同時期の遺構を挙げるのは難しいが、SG 01 周辺の遺構群が挙げられる。SG 01 に付属する構造物と考えられる滝組が、西園寺北山第安民沢と類似することを考えれば、安民沢が造営された貞応元年～元仁元年(1222～1224)と近い年代を与えることができる可能性がある。SG 01 は、室町時代後期に大きく改修されており、室町時代後期以前の埋土からは、出土遺物がなく、築造年代を探ることは難しい。しかしながら、SD 01 から出土したような遺物を使用した施設が近接地に存在したと考えれば、SG 01 のような庭園遺構も同時期に存在した可能性は、十分にあり得るものと考える。SG 01 に注水する溝である SD 62 からは出土遺物がなく、SG 01 の北東に位置する景石 1 及び景石 2 は、室町時代後期に据え直されたものであることが明らかになっているが、SD 62 が当初から存在し、景石 1 及び景石 2 が多少の位置の据え直しはあるものの、当初から近くに据えられたものであるとすれば、山側から SD 62 を用いて SG 01 に水を引き込み、満水時には、SG 01 の南側から水を排出し、滝組を通り、SG 03 に流れ込むという水の流れを再現することができる。

『百鍊抄』建保 5 年(1217) 1 月 10 日条の記事によれば、「上皇御移徒水無瀬殿新御所。是本御所去年人風洪水之時。顛倒流出之間。更點他所所被造営也。」とあり、建久 10 年(1199) 頃に後鳥羽上皇によって造営された水無瀬離宮(下御所)は、建保 4 年(1216) に洪水の影響により建物が転倒し、翌年から山上に建て直し(上御所)が開始されていることが知れる。平成 21 年度の発掘調査の際に検出した水無瀬離宮関連施設と考えられる建物跡が、広瀬遺跡という平地部分から発見されたのに対して、今回の調査地は山の斜面部分に位置する。SD 01 から出土した瓦は、平成 21 年度の発掘調査で出土した瓦と同時期・同産地のものであり、一部同範品と考えられるものも存在する。これは、これらの遺構が水無瀬離宮関連施設であることを示唆するものと考える。また、『明月記』建保 5 年 2 月 24 日条の記事によれば、「山上有池、池之上被構瀧、塞河掘山、一両日引水、又件瀧為立大石、兼遣取材木、為引石云々、國家之費只在此事歟」と記述され、建て直し後の水無瀬離宮は、山の上に池があり、池の上に滝が有り、山を削り、河を堰き止め、水を引き、大石を立て、材木を調達し、石を敷いた豪華な宮殿であったことを知ることができる。SG 01 周辺の遺構群が、SD 01 と同時期まで遡ることができるのであれば、SG 03 の上に滝組を置き、SG 01 に SD 62 から水を引き、SG 01 の周辺には景石 1 と景石 2 を据えるといった『明月記』に記述されたものと似た風景を再現できる。今回の調査では、明確な建物遺構を検出していないものの、SD 01 からの出土

遺物や庭園遺構が存在する以上、近接地に格の高い建物跡が存在した可能性が高く、その建物が水無瀬離宮に属する者である可能性は十分に考えられる。しかしながら、当調査地の尾根に囲まれた谷地形という狭い立地を考えると、当調査地付近に水無瀬離宮の中心施設が密集していたとは考え難い。建て直し後の水無瀬離宮跡は、本町の百山付近と推定されているが、今回の調査成果から、百山付近を中心地として、山間に存在する平坦地に離宮関連施設を点在させる形をとっていたのではないかと推測する。

また、出土遺物がなく、年代の特定ができなかったが、SD 62とほぼ並行する根石や礎石を有するP 589～P 592なども検出しており、同時期の樋などといった施設になる可能性がある。

SD 01の西側では、SG 01周辺の遺構群以外、少數のピットや土坑、溝跡を検出しているだけであるが、東側は、明確な建物遺構の存在は確認できていないものの、ピットなどの遺構が密集している状況を確認した。SD 01が区画溝や築地塀など空間を仕切る役目を有し、西側が上皇を中心とする貴族達の遊興の場、東側が臣下達の離宮経営の場として分けられていた可能性がある。また、SD 01内から出土した遺物の年代をみると、12世紀末～14世紀前半の遺物が存在し、その建物跡が14世紀前半までは存続していたことを知ることができる。承久の変（承久3年、1221年）により後鳥羽上皇が隠岐に配流された後の水無瀬離宮の状況を文献からは知ることはできないが、その後もしばらくは存続していたことが明らかとなった。

【室町時代（15世紀）】

鎌倉時代の遺物の出土量と比べると少なくなるが、瀬戸産の施釉陶器の花瓶や天目茶碗などが出土しており、この時期も通常の集落として利用されたとは考え難い。何らかの祭祀に使用されたと考えられる羽釜が埋め込まれた土坑や、次の時代に宝篋印塔の蓮華座が礎石として転用されたことを考えると、この時期には寺院として利用された可能性が高いものと考える。

【室町時代（15世紀末～16世紀前半）】

この時期には、東辺段差部分に、南北方向の東西する石垣等が築造されるなど、寺院跡とみられる遺跡に大きな改変が加えられている。地形的には低地側となる石垣の東側は、大きな撹乱坑等で明確ではないが、谷川等も利用した大規模な濠状、あるいは池状を呈した遺構が形成されていた可能性が想定される。この石垣は、単に土留めを目的にしたものではなく、濠等の施設と連動して機能する防御的性格を有した施設とみている。石垣の西側では、遺構密度も高くなる。

また、この時期には、利用者の増加を示し、遺物の出土量も、鎌倉期に次ぎ増加している。明代の青磁碗や染付等の輸入陶磁器や天目茶碗を含む瀬戸美濃産の国産陶器類、瓦器の火鉢や風炉、土師器の燈明皿、瓦など京都市内や近郊の同時期の寺院跡からの出土遺物に通じる様相

を示した遺物が数多く出土している。このような出土遺物の様相からも、この時期にも寺院として存続していたものとみられるが、16世紀前半段階の畿内の動乱の内にあって、西国街道にも近い高台上に立地していたこの推定寺院跡も、城郭的要素を付加した改造が加えられたものと考えられる。

この時期までSG01が存続しており、礫敷きのものに整備され、景石も据え直されたものと考えられる。このような大きな改修を行えるほどの財力を有していたにもかかわらず、急速に力を失っていったのか、この時期以降の遺構・遺物量は極端に減る。

【室町時代以降（16世紀後半～）】

16世紀後半以降には、前時代までに比して遺物の出土量が大きく減少し、遺構も用・排水路的溝やそれらと段差を有する地境と関連した密集的杭列、あるいは水留め施設等耕作と直接的に関連した限定されたものとなる。当地では、人々が数多く出入りする施設を含めた居住的土地利用が一旦終焉し、田・畠等耕作地的利用へと大きく転換を遂げたものと考えられる。今回の調査によって、室町時代後期の土層の直上（遺構）面に、耕作層が直接的に積土されていることが明らかとなった。耕作土層の出土遺物からは、16世紀後半期内に耕作地化したとは断定的に言えないが、近世に入ったかなり早い時期には耕作地化が進んでいたようである。明治時代の陸地測量部作成の仮製地図では、当地は複数の水田が表記されており、近世から近代初頭までは、耕作地としての利用が続いていることになる。戦時中には桜井ノ駅射撃場となり、その後、宅地的土地利用が再開されたが、近年は役場駐車場となり、現在に至る。

第2節 終わりに

今回の調査では、12世紀末頃以降、16世紀前半頃までの中世全般を通じ、進展した居住地的土地利用及び近世並びに近代初頭までの耕作地的土地利用の有様が明らかになった。特に鎌倉時代初頭の上御所とも称された再建後の水無瀬離宮の一端を確認することができ、初めてこの離宮の位置が明らかになったことは、研究史的にも意義深い成果といえる。後鳥羽上皇が贊を尽くして造営したと言われる水無瀬離宮跡の実像を解明する第一歩となる発見ともいえる。

また、室町時代では、文献上では知られていない中世寺院が存在していることも明らかとなつた。考古学的にも、文献的にも、先行する離宮とその推定寺院との歴史的関係性の解明が、今後の大きな課題となるであろう。鎌倉時代以降、中世を通じて宮殿や寺院として土地利用されてきた歴史からも、調査地を含めた当地は、地域の人々にとって神聖な土地として認識されていたと考えられる。

なお、SG01周辺の遺構群については、事業主の協力の下、遺構群の一部を町立歴史文化資料館に運び、住民の皆様にも御協力いただき、町立歴史文化資料館の前庭に移築復元することができた。今後も、この移築復元庭園を活用し、文化財保護の普及啓発に努めていきたい。

報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかさいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	西浦門前跡発掘調査概要報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第41集
編著者名	木村 友紀、久保 直子、坂根 瞬
編集機関	島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL.075-961-5151
発行年月日	令和4年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号			(m ²)	
遺跡範囲							
にしうらもんぜんいせき 西浦門前遺跡 (NM14-1 西浦・西浦門前)	しまもとちょうざくらいい 島本町桜井三丁目 362-1 外	27301	14	34° 53' 01"	135° 39' 40"	2014.6.16 ~ 2014.8.31	1579.2 その他建物建設工事に伴う記録 保存調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
にしうらもんぜんいせき 西浦門前遺跡 (NM14-1 西浦・西浦門前)	宮跡	平安 中世 近世	庭園 寺院	土師器・須恵器・縄文陶器・灰釉陶器・輸入陶器・國產陶器・瓦質土器・瓦・石製品	水無瀬離宮に隣接する 庭園遺構を検出

島本町文化財調査報告書 第41集

発行	島本町教育委員会
	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL.075-961-5151
発行日	令和4年3月31日
印 刷	三星商事印刷株式会社 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル井財天町300 TEL.075-256-0961

図 版



調査地全景（西から）



第1遺構面空撮

圖版一
第2遺構面空撮・第3遺構面空撮



第2遺構面空撮



第3遺構面空撮



P 136 (南から)



SK 04・SK 05 (西から)



SD 02 (西から)



SK 06 (北から)



SD 02—石五輪塔出土状況 (西から)



SX 01 (西から)



SD 02 (調査区西壁) 五輪塔 (水輪) 出土状況 (東から)



SX 01 断面 (西から)

図版四
第1遺構面検出遺構2・第2遺構面検出遺構1



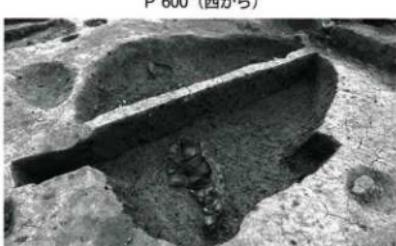
図版五 第1遺構面積出遺構3・第2遺構面積出遺構2



石垣（東から）



SD 01（南から）





SG 01 第Ⅱ期（南から）



SG 01 第Ⅰ期（南から）



SG 01 滝組（南から）



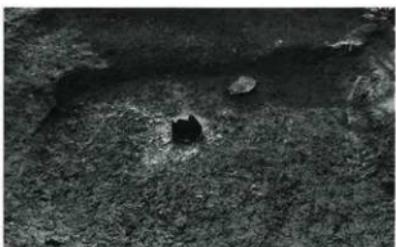
SG 01 景石2（東から）



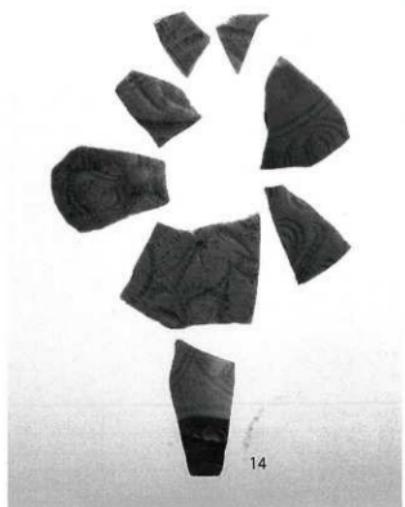
SG 01 北西遺水石組（東から）



SG 01 景石2 信楽焼出土状況（南から）



SG 01 瓦質土器据付状況（東から）



圖版一〇 出土遺物2



20



25



21



29



23



35



24



37



39



46



42



47



44



49



45



51

圖版一
出土遺物4



52



59



54



57



53



60



55



63



58



66



68



73



74



73



77



76



78



80



84



81



85



82



86



83



87



88



94



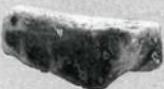
89



95



92



96



93



97

